# ブルーモーメント

はじ

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

のんびり生きたいけど出来ない、これは三十路の男が暁になってしまった話。

緒注意

これは艦隊これくしょんの二次創作になります。

苦手な方、こんなの暁じゃないという方ははブラウザバックを推奨します。

初投稿作品になります。

更新は出来次第です。

タグは増える予定。

# 目次


元帥と吹雪とお仕置きと ―― 1
青葉と新聞 ―― 4
続青葉と新聞 ―― 8
那珂と音楽 ―― 12
長女の秘密？ ―― 18
続長女の秘密？ ―― 23
続々長女の秘密？ ―― 28
ストーカー？ ―― 36
イ級とブースター？ ―― 40
カム着火インフェルノ！ ―― 44
去らばイ級！ ―― 51
艦娘の秘密？ ―― 57
家出でＧＯ！ ―― 68
まるゆフィッシュ！ ―― 75
日替わり秘書艦鳳翔 ―― 83
元帥、胃痛との戦い ―― 89
激闘、カレー大会開幕！ ―― 95
激闘、カレー？大会！ ―― 101
蜻蛉切り！ ―― 115
個人演習大会！ ―― 121
クマ！クマ！クマ！ ―― 129

# 元帥と吹雪とお仕置きと

「ぎゃあああぁぁぁ！」

俺の名前は暁型一番艦の暁だ。転生者としてこの世界で生きている。そんな自己紹介よりも今は目の前のこいつにお仕置きしなければならない。

「暁さん、何を・・・・・・」

「お仕置きに決まっている」

護身用の拳銃タイプのスタンガンを腰に着けたホルスターにしまうと秘書艦の吹雪を見る。うん、夕張に改造させたけど思いの外電圧が高くて床でビチビチしてる男を見るより可愛い女の子見た方が精神的に良いよね。もともと俺って男だし。

「さすがにやり過ぎです」

そう言えば昨日まで吹雪はいなかったから知らないのか、知ったらこのあと大変だろうな元帥が。別にいいか、俺に関係ないしな。それよりも俺のコレクションに手を出したんだからその分の補填もしてもらわないといけないし、全部暴露しとくか。

「昨夜、こいつ・準鷹・那智・足柄・千歳・千代田達で酒飲みをしていたらしい。俺は哨戒任務だったから聞いた話しだ。ここまではいいか？」

「はい」
「ここからがお仕置きの理由だ。まず、俺の部屋への不法侵入。強盗にでもあったかのように荒らされてたよ。そして俺の部屋にあったアルコール類のコレクションを持ち出し飲み会を再開。その後、那智・足柄・準鷹・千歳・千代田を回収しに来た羽黒・飛鷹・鳳翔へのセクハラだ」
　あっ！俯いてプルプルしてる。そうだよな、カッコカリついてても一応旦那だもんな。自分の留守に泥棒して浮気みたいなことされたら落ち込むよな。
「暁さん」
　スゲー声低いんですけどフブキサン？何その笑顔？笑顔は威嚇って聞いたことあるけど、何その威圧感？俺って被害者だから、夜間哨戒してていなかったから、だから止めてその笑顔。
「コレクションの被害はどれくらいですか？」
「あぁ、まだ部屋の掃除も出来てないから分からないが、プレミアのついてるワインやウイスキーが空いてたから、二百万は越えると思う。後で調べて請求するよ」
「そうですか・・・・・・」
　欧州遠征で手に入れたのもあるし、現物で返してもらえるかな。
「俺が怒っているのは分かってもらえたか？」

「はい、それで相談なんですが、そのスタンガン貸してもらえますか？」
「カートリッジはあと3つしかないからな」
「構いません」
「ならあとは、吹雪に任せるよ。俺は他の面子に説教してくる」
「はい、任せてください」
怖い。笑顔が怖いよ吹雪さん。まぁ、巻き込まれる前にこの場を離れよう。まずは食堂でメシを食おう。それから説教して部屋の片付けだな。片付けないと寝れないしな。酔った勢いって本当に怖いな。気をつけよう。あと本気でキレた吹雪も怖い。早くこの部屋出よう。
「さて、元帥。何か言いたいことはありますか？」
「まて吹雪。話しを聞いてくれ、まずそのスタンガンを、ぎゃあああぁぁぁ！」
執務室から響く声を背に廊下を進む。うん、俺には何も聞こえない。そう自分に言い聞かせた。食堂に行く途中、とりあえず午前中は執務室に近寄るなと大淀に伝え詳しく話すといい笑顔で「分かりました。請求書もらえれば元帥の給料から引きますからね」と言ってもらえた。やっぱり笑顔は普通が良いよね。その日午前中では終わらず夕方まで執務室からは元帥の叫び声が聞こえていたらしい。俺は説教したあと部屋の片付けをした。下着がほとんどダメになっていた。凹む。

# 青葉と新聞

「青葉やらかしたわね」
「どうしたんです?」
　私は青葉型一番艦の青葉です。少し前に大湊から転属して参りました。なにやら古鷹が焦っているようですがどうしたんでしょうか?
「どうしたんです?じゃないわよ。今日の『艦隊新聞』私を通さずに発行したでしょう」
　そうでした、こんなネタ潰されては行けないと内緒で発行したんでした。それにしても転属してすぐにこんなネタに出会えるなんて運が良いです。
「いい出来だったでしょう!『暁ちゃんと吹雪さんの百合関係』」
「馬鹿め・・・と言って差し上げますわ!」
　古鷹それ違う重巡違いです。胸部装甲にも差が・・・
「失礼な事考えてるわね」
　青葉、ポーカーフェイスには自信があるんですが読まれてるみたいです。
「あのねぇ、青葉。吹雪さんは元帥の秘書艦で、総旗艦なのよ!それに暁さんは、元帥が初めて建造した艦娘。所属したばかりの貴女がこの鎮守府で一番敵に回してはいけな

い艦娘二人なのよ。私もここでは古株、だからこそ貴女の新聞でネタのラインを見て行ける行けないの判断をしていた訳だけど、今回のは完全にアウトだわ」

吹雪ちゃんも暁ちゃんも大湊にはいましたから扱いは分かってます。古鷹は駆逐艦相手にそんなに焦るのはどうしてでしょう。

「ねぇ、古鷹。なんでそんなに焦ってるんですか?」

「青葉!貴女が解体されても私は友達だからね」

「解体!どうしてそんな話に!」

古鷹、なんでそんなにさめざめ泣いてるんですか?私もしかして本当に解体されるんですか?

「ここにいましたか」

「お前が青葉か?」

あっ!これもしかしなくてもヤバいやつだ。

おぅ!俺の名前は暁だ。ダメになった下着は吹雪に買ってきてもらったぞ。下着売り場はいつになっても慣れないからな。元は男だし、吹雪には感謝だ。結局元帥は3ヶ月給料無しになった。吹雪がいるから飢えることはないだろう。俺は今日から休みだ

から昼飯食って工廠脇にある喫煙部屋で一服中だ。このロリボディになる前からタバコは止められない。この喫煙部屋も妖精さんと俺で作った。全スロドラム缶で単艦遠征に行ったのはいい思い出だ。帰りに運ぶのが面倒になって駆逐イ級をしばいてここまで運ばせたのもいい思い出だ。今ではペットとして鎮守府近海で飼っている。まぁ、この鎮守府でタバコ吸うのは俺だけだから気を使わざるを得ない。昔、食堂内で吸って間宮に怒られたし、寮の部屋で吸ったら火災報知器が鳴って吹雪に怒られた。凹む。この部屋は冷暖房完備だしぶっちゃけ寮の部屋より居心地がいい。

「暁さん大変です」

　吹雪がここに来るなんて珍しいな。焦ってるけど何かあったのか？

「どうした？」

「今日の『艦隊新聞』読みましたか？」

　新聞？はて、そんなものあったかな？

「なにそれ？」

「そうでした。暁さんは遠征や哨戒でしばらく鎮守府にいなかったでしたね」

「あぁ、それで今日から3日休みだ」

「暁さんがいない間に大湊から広報担当として青葉さんが転属になったんですよ。それで新聞を発行することになったんですが、今日の一面見てください」

なになに、『秘書艦吹雪と暁の百合関係?!』いきなり頭の悪そうな見出しだな。なるほど、下着を買ってきてもらった時の話を適当に書いたんだな・・・・・・なんだと!元帥との三角関係もあり得るだと、馬鹿な!

「これは・・・・・・」

「そうです。外への流出はなんとか秘書艦権限で押さえましたが、とりあえず鎮守府内のほとんどの方が読んだと思われます。ここは娯楽が少ないですしね」

なんてことだ。俺があの変態ヘタレと恋仲だと!俺は男とウッホな関係に成りたいなんて性癖はないんだぞ!ふざけるな!

「吹雪!これを書いた奴は何処にいる?」

「ここにいましたか」

「お前が青葉か?」

私の目の前に秘書艦の吹雪ちゃんと暁ちゃん?が黒いオーラを纏っています。これはちゃん付けではなくさん付けで古鷹が呼んでいたのも頷ける威圧感です。ちょっと助けて欲しいです。古鷹?あっ、涙目でプルプルしてる。これはもしかしなくても孤立無援ってやつですか?ワレアオバ!ワレアオバ!

# 続青葉と新聞

俺の名前は暁だ。自分でもたまに忘れそうになるが一応転生者だ。今広報室にいるぞ。目の前にはどうやらお仕置きが必要な艦娘がいる。とは言ってもすでに吹雪から説教されてるが。吹雪も元帥の相手で慣れてきたもんだ。だが、俺のターンは終わっていない。さて、どんなのが良いかな！

「まず、弁解を聞こうか？」

なんでいるのか分からないが、古鷹が涙目でプルプルしてる、青葉と知り合いか？止められなかったから責任でも感じてるのか？まぁ良い、今の俺はおこだ、ぷんすかしてるぞ！

「わ、私はこの鎮守府にき、来たばかりですがご、娯楽が少ないとか、感じたのです。だ、だからみんなに楽しんでもらえるようなき、記事を書きたいと思いまして」

「俺は楽しくないな」

嘘です。今ちょっと楽しくなってきた。こんなに吃るなんて相当怯えてるな。理詰めで責めてみるか。

「す、すみません」

「お前は、艦娘・妖精保護法は知っているか？」
「はっ、はい、大湊にいるときに勉強しました」
「まぁ、人間達の法律が艦娘や妖精さんにも適用されるのを知っていればいい。今回の件だが、虚偽報道による名誉毀損に当たる。お前の記事には事実も真実も一つもない、これは名誉毀損で、訴えることもできる。喜べ、艦娘から初の刑罰を受けることになるぞ」
「そ、そんな・・・・・・」
あっ、泣き出した。なんか古鷹に謝ってる。ついでに古鷹も泣き出した。だからなんでお前がそこにいるんだ？
「吹雪どうする？」
「そうですね。まずは新聞に虚偽だった事を書いてもらいましょうか？」
「そうだな、読んだ奴等の誤解を解いてもらわないといけないしな」
さすが吹雪、この後の流れまで考えていたか！罰もちゃんと受けてもらうぞ。
「罰はどうする？」
「暁さんは何かあります？」
考えてなかったぁ！吹雪よ、罰まで与えてこそだろうよ。うん、知ってた。吹雪は昔から甘いからなぁ。叱ったりするのも代わりに俺とか大淀がやってたし。いつだった

か、卯月と一緒にイタズラした弥生に「ごめんなさい。お父さん」って言われたっけ。そのあと恥ずかしがってた弥生は可愛かった。でもお父さんはないな。前の身体ならまだしも今はロリボディだし。そんな事より罰か、何にしようか？悪いことしたらやっぱり尻叩きか？

「ちょっと待ってください」

なんか決意した表情だけど古鷹よ、青葉を背に庇って悲壮感ただよってるけどどうしたの？

「青葉の解体だけは何卒お許しください」

ちょっとまて解体ってなんだ？吹雪を見るとこっちも困惑してるぞ！どっからでたんだそんな話。だからこの部屋に俺達が来た時から古鷹は涙目だったのか。

「何言ってるんだ？」

「ひゃい」

あっ、噛んだ。本当にどうしたんだ古鷹。

「解体しないんですか？」

「しないぞ」

「よがっだぁ～、あおばががいだいざれないで～ぼんどによがっだぁ～」

吹雪も目が点になってるし、古鷹は青葉を抱きしめて号泣してるしなんだこれ？なん

かいい話風に終わりそうだがそうはいかないぞ。誤解を招くような記事を書いたんだ、罰はちゃんと受けてもらうぞ！

「さて、青葉よ。罰は受けてもらうぞ！」

古鷹を青葉から引き剥がすと俺は青葉に膝かっくんをする。うん、上手い具合に床に手をついたな。久しぶりだが悪い子にはきちんと躾は必要だな。せーの！

「なに！痛、いったーい！」

この日、俺は手が痛くなるまで青葉の尻を叩いた。青葉の悲鳴は結構響いていたらしい。夕食の時にみんなから奇異の目で見られた。凹む。

# 那珂と音楽

「川内ちゃん、那珂はもうダメかもしれないです」
「どうしたの？」
「きよ、曲が思い浮かばない」
「はぁ？」
「締め切りが近いのに、何も浮かばないの！」
　川内です。朝食を食べに食堂に来たらテーブルに突っ伏すアイドル活動中の妹がいました。久しぶりに会ったのにこっちを見る事なく愚痴が始まり、ちょっと切ないです。
「あんた、曲作った事あったっけ？」
「ないです。那珂ちゃんは才能ないんでしょうか」
「那珂ちゃんはアイドルだから～」なんて言ってた自称アイドルの妹は元帥の軽いノリもあって、全国の那珂ちゃん代表で大本営公認のアイドルとして売り出しちゃいました。それでいいのか大本営？まぁ、本人が喜んでるならいいけど。
「ちなみに今までの曲って誰が作ったの？」

「プロデューサーだよ」
「じゃあ、今回も頼めばいいじゃん」
「それが、歌って踊れる正統派アイドルの形は出来たから今回は自分で作って見ようか？って話になって、今度発売される那珂ちゃんの十二曲入りのファーストアルバムに一曲入れる予定なの。プロデューサーは今頃残りの八曲を作ってるだろうから頼めないよ」
　そう言えばシングルは三曲出してたわね。この一年でカップリング曲も入れれば八曲か、誰なのか知らないけど、シングル三枚でトップアイドルまで連れて行ったんだから敏腕なのね。
「アルバムにカップリング曲は入らないの？」
「全部書き下ろしにするって言ってたよ」
「なら出来てる曲があるだろうから被らない様に出来てる曲を教えて貰ったらいいんじゃない？アルバムって適当に作った曲を入れるんじゃなくてアルバムタイトルとかのテーマに添って曲作りするんでしょ」
「そうだね・・・・・・川内ちゃん、プロデューサーの所に行くのついてきてくれる？」
「はぁ？私も行くの？私、今晩の夜間哨戒任務あるから外出は出来ないよ」
「それは大丈夫。プロデューサーはこの鎮守府にいるから、今日は休みって聞いてるし」

「ちなみにプロデューサーって誰？」
「ん、暁さんだよ！」

どーも暁です。一応転生者です。ここの所休みが休みじゃない事態に見舞われ、自由時間が減っています。さすがに今日くらいはゆっくりしたいので喫煙部屋に引きこもってます。お酒は夜飲むとして、これからする事を考えながらタバコ吸ってます。
「プロデューサー！アルバムの曲を教えてください」
「いきなりどうした？」
「曲作りの参考にしたいと思って！」
平穏がいきなり去って行ったぞ。畜生。
「そこのパソコンに入ってるから勝手に聞け」
「それと今回のアルバムのテーマは何なのか教えて欲しいです」
テーマか？知らないなぁ。俺の青春時代の曲だしな。この世界は似てるようで似てない。元の世界でいたアイドルや歌手もいないからパクり放題だしな。那珂のおかげで印税がたくさん入ってうはうはだ。テーマか適当に答えよう。そう言えばタイトルも決めてなかったな。今決めるか！

「う～ん、『今、会いに行きます』かな」
「うわ、こんなに曲がある。全部暁さんが作ったの！すごいわね」
川内よ。いつからいたんだ？ビックリするから気配は消さないで欲しい。
「そのフォルダーじゃない。那珂って書いてあるのがアルバムの曲だ」
「ねぇ、那珂。八曲って言ってなかった？このフォルダーの中には百曲以上あるんだけど」
「さっすがプロデューサー！候補がたくさんある！」
「那珂が作った曲とシングル三曲に合わせるから候補がないとテーマに添わなくなるからな」
違います。適当にアイドルと呼ばれた人達の曲を思い出す限り入れただけです。昔はバンドやってたからモテルために流行りの曲も覚えただけです。思い出すのに苦労したよ。でも、俺はロックが好きなんだ。鼻唄を元帥に聞かれたのが運のツキだった。曲作りが任務ってなんだよ。それでいいのか海軍！
「それにこれから売り出していくんだからたくさんあればタイミングで出して行けばいいしな」
「暁さんは凄い才能だよね」
なんだいきなり？那珂が普段見たことないくらい落ち込んでるぞ。川内も心配そう

にしてるし、何があったんだ？

「暁さん。実は那珂が曲を作れないの。だからコツとかあったら教えて上げて欲しい」

　シリアス過ぎる。だからパクりだって！俺に才能あれば前の身体の時にデビューしてるって！こんなこと誰にも言えないけどさ。真面目に答えるか！

「う～ん、そうだな。那珂はどうしてアイドルになりたかったんだ？」

「それは・・・・・・」

「その気持ちを曲にすればいいんだよ。自分らしくとか考えるとまとまらなくなるけど、初めて作る曲なんだから気にせずただ書いて見るのもいいぞ。難しい言葉はいらない那珂は好きでアイドルやってるんだろう」

「そうだね。難しく考えてたかもしれない。元気よく可愛いのが那珂ちゃんだもんね」

「その調子だ。候補はたくさんあるから好きに作りな。いいアルバムが出来るさ」

　いい話でまとまった。良かった、これでなんとかなるだろう。俺も経験あるから分かるけど曲作りって大変だよな。たくさん作ってる人とか本当に尊敬するぜ。ラブソングとかバリエーション考えるのとか凄いと思う。

「それにしても、よくこんなに歌詞かけるわね」

　馬っ鹿、川内。そのフォルダーは！俺の黒歴史じゃねぇか！やめろぉぉぉぉー！曲を流すな！うぅ～恥ずかしいよ～。

後日、川内が俺の黒歴史を鼻唄で歌っているのを聞いた他の艦娘達も聞きたいと喫煙部屋に集まり鎮守府中に広まった。

# 長女の秘密?

ズドラーストヴィチェ。暁型二番艦の響だよ。その活躍ぶりから不死鳥の通り名もあるよ。今日、佐世保鎮守府から横須賀鎮守府に転属になったよ。姉妹である雷や電は別の基地から明日来るらしい。横須賀鎮守府には元帥が建造した暁がいるんだよね。佐世保にはいなかったけど鹿屋基地の暁が佐世保に研修で来ていてたくさん話をしたからレディっぷりには理解があるつもりだよ。

「よく来たな響。案内するぞ」

これは誰だい?第六駆逐隊って言えばセーラー服じゃないか!目の前の相手は本当に暁かい?白いワイシャツの上に黒いベスト、スカートじゃなくて黒いズボン。あぁ、特Ⅲ型を表すバッチがベルトのバックルになっているのか!分かった。これは私服なんだね。でもダメじゃないか、勤務中は制服着用の義務があったはずだよ。

「暁なんだよね」

「暁だよ。ボーっとしてどうした、移動で疲れたか?着任の挨拶したら休めるようにしてやるからちょっと我慢しろよ」

いくぞって言って歩き出しちゃった、追いつかないと。私じゃなくて俺って言ってた

けど本当にこれが暁なのかい？サプライズでドッキリとかじゃないよね。
「そんなに俯いて具合悪いのか、本当に大丈夫か？」
「ねぇ暁、制服はどうしたんだい？」
「ん？これが俺の制服だぞ」
「違う、第六駆逐隊は皆、セーラー服のはずだよ」
「そう言われても建造された時からこの格好だったしな」
どういうことだい？鹿屋も任務であった佐伯湾の暁もセーラー服を着ていたはずなのに。
「服が違うから驚いてたのか？まぁ、気にするな。他所は他所、家は家だ」
気にするに決まってるじゃないか！不死鳥もビックリだよ。
「入るぞー」
えっ！ちょっと待って何で元帥の執務室のドア蹴り開けてるの？本当に何なのこの人？暁の皮を被った何かじゃないの？
「君が響か、ようこそ横須賀鎮守府へ、これからよろしく頼むぞ」
普通だ。元帥は普通だ。でも、ドアの蹴り開けは注意しないんだ。
「響は調子が悪いみたいだから、今日は休ませてやってくれないか？旅行は明日、雷や電が来た時に一緒にやるから」

「構わないぞ、そんなに急ぐ事でもないしな、吹雪、予定の調整頼む」
「分かりました。佐世保からは遠いですからね、疲れがでてるんでしょう」
「俺は部屋の準備をしてこよう。吹雪案内を頼む」
　暁が部屋をでて行ったのを確認するとため息が出た。吹雪を見ると佐世保にいる吹雪と変わらない。何で暁だけ違うんだ?
「少し質問をいいだろうか?」
「なんだい?」
　軽いな元帥。佐世保の提督とは大違いだ。
「暁は、本当に暁なのかい?私の知っている暁とは全然違うんだが」
「そのことか・・・・・・・」
「そうですねぇ・・・・・・」
　二人とも苦笑いを浮かべ言葉を濁している。何だろう聞いてはいけない事なのだろうか?
「暁は建造した時からあんな感じだったよ。響は妖精さんの乱は知っているかな」
「佐世保の新人研修で勉強したよ」
「あれって、主導したの暁なんだよね。僕が知ったのは終わったあとだったけど・・・・・」
　妖精さんの乱。待遇改善を求めたストライキ。これにより日本中が大混乱に陥った。

建造・開発のストップはもちろん、艦娘は単独で装備を動かすことは出来ない。装備妖精がいて始めて動かせる。艦娘も海に出ることが出来なくなった事件。これにより『艦娘・妖精保護法』が制定された。それを主導した？意味が分からない。

「暁を建造してそんなにたってない時期だったんだけど、家は普通に出来てたからねぇ、その時は吹雪と暁しかいなかったけど」

「そうですね。資材の流通がストップしてたから暁さんの座学してましたね」

「それで問題は、第二次妖精さんの乱の方だね」

第二次妖精さんの乱。確か、艦娘の給料の着服とかのブラック基地が増え妖精さんが実力行使にでて多くの提督や憲兵が処された事件だったはず。

「そのせいで大本営が横須賀に移動する事になって僕もここに移動して元帥なんて立場になっちゃったんだけど、大本営潰したのは暁なんだよね」

「はぁ？」

「あの時は後始末が大変でしたね」

元帥と吹雪が遠い目をしてる。何してんの暁？大本営潰すって馬鹿なの？

「ちょっと行ってくるって言って大本営潰すなんて思わないよねぇ・・・・・・」

何その近所に買い物に行ってくるノリ。そんなんで潰されたの大本営！

「海軍内の情報統制で妖精さん達がやったことにしたけど、これで暁を表に出せなく

なっちゃったんだけどね」
「罰を受けなかったのかい?」
「罰も何も初めから暁はそこにいなかったことになってるから、まぁ、今後のことを考えたら単艦でしかも駆逐艦がその時の最高戦力揃えた大本営襲撃を成功させるんだから解体とか出来ないよね」
　ぶっ飛んでるとしか言いようがないよ。元帥も頭のネジ外れてるんじゃないの?そんな危険な艦娘を側においてるなんてどういう神経してるんだ?
「少し変わってるけど、暁は優しいんだよ。守る対象が人間ではなく艦娘や妖精に向いてるけど、悪いことをしたらちゃんと叱るしね。だから、もう少し僕にも優しくしてくれると有難いけどね」
「元帥はもう手遅れじゃないですか?」
「そうなの!」
　暁のことは変わってる姉と思えばいいのかな?

# 続長女の秘密？

「この広さ、四人部屋よね」
「そうなのです」
「やっぱりそう思うよね」
　暁型四番艦の電なのです。トラック基地から雷ちゃんと横須賀に転属してきたのです。響ちゃんは昨日のうちに到着したと聞きました。ここ横須賀には暁ちゃんがいると聞いていたのですがまだ会えてないのです。着任の挨拶をしたあと響ちゃんも旅行してないそうなのでまず部屋へと秘書艦の吹雪ちゃんに案内されたのですが。
「暁ちゃんは違う部屋なのです？」
「暁さんは特別任務があったりするから別の部屋に移ったの、それまではこの部屋を使っていたんだけどね」
「一人でこんな広い部屋使ってたの？」
「姉妹艦がいなかったから一人で使ってましたよ」
「暁ちゃんの部屋はどこなのです？」
「旅行の時に案内するけど工廠脇にありますよ」

トラック基地では第六駆逐隊が揃って同じ部屋だったのです。新しく建造された電と雷ちゃんは二人部屋で過ごしましたがみんなよくしてくれたのです。何で暁ちゃんはここを出たのでしょうか?

「二人共聞いてくれ、トラックには暁はいたかい?」

「いたわよ。っていうか第六駆逐隊は揃っていたわ、私と電は新規建造の艦だから研修が終わってここに転属になったの」

「そうか、ならここの暁に会っても取り乱さないように気をつけるんだ!」

響ちゃんは何を言っているのです?暁ちゃんは暁ちゃんじゃないのです?

「何言ってるの響、レディしてるのが暁じゃない!トラックには少ししかいなかったけどあの印象は変わらないんでしょ」

「全然違う。今までみた暁ではないと思った方がいい。私は昨日会ったんだが全然違うんだ、悩み過ぎて寝不足だよ」

違うのです?電はトラックの暁ちゃんしか知らないからどう反応していいか分からないのです。吹雪ちゃんも苦笑いしてるのです。

「暁さんは今日は特別任務で夕方までいませんよ。皆さんの歓迎会迄には戻ると思いますから会うのはその時になりますね」

「特別任務って何なのです?」

「それは海軍の機密に関わりますから私から言えることではありません」
「はわわ、そんな重要任務に行ってるんです！暁ちゃんは凄いのです」
「ここの暁は凄いのね」
「ズドーラヴァ！」
　海軍の機密に関わるような任務につくなんて暁ちゃんは凄いのです！電も元帥さんの艦隊にいればそんな任務につくこともあるのでしょうか？その時は暁ちゃんにアドバイスを貰うのです。
「ねぇ響。そんなに悩んでるなら旅行でいろいろ回る時に聞いたらいいんじゃない？」
「さすが雷！なら吹雪にも聞いてみよう」
「えぇ！暁さんの何が聞きたいんですか？」
「う～ん、吹雪が一番暁と付き合いが長いんだよね？」
「そうですね、元帥と建造に立ち会いましたし」
「吹雪からみた暁の印象は？」
「簡単な言葉で言うのなら天才でしょうか」
「天才？」
「戦闘だけでなくいろいろなことに才能を発揮してます。元帥が今の地位についたのも暁さんがいたからこそですし、私達艦娘の地位向上さらに未来を作ってくれたのも暁さ

んです」
　凄いのです!元帥の秘書艦の吹雪ちゃんがベタぼめなのです。私達の地位向上や未来って凄いのです!
「ここの暁は凄いのねぇ、艦娘代表みたいな感じじゃない?」
「でもそんな活躍聞いてないのです」
　研修で勉強したなかには暁ちゃんの話なんてなかったのです。何か事情があるんでしょうか?
「残念ですが暁さんの活躍は、ほとんど表に出ることはないと思いますよ」
「なぜなのです?」
「人間にとって不都合な事が多いからです。暁さんには多岐に渡る才能があります。しかし、有りすぎると言っていいでしょう、だから暁さんを恐れているのですよ。これが暁さんが表に出ない理由です」
「それじゃ利用されてるだけじゃない。暁は知ってるの?」
「多分理解してると思いますよ。その中で自分に都合のいいようにやってます。むしろ都合が悪くならないように立ち回っているといった感じでしょうか」
　持ちつ持たれつなのです。でも内容は大人な感じがするのです。トラックの暁ちゃんは大人なぶったり、レディ目指したりするお子様だったのです。違和感が凄いので

す。

「次は誰に聞こうか？」

「情報なら青葉さんじゃない？トラックでも新聞書いてたし」

「この時間なら広報室にいると思いますので、執務棟を案内しますね」

いろんな人に話を聞いて暁ちゃんに会う前に違和感を解消するのです！

# 続々長女の秘密?

「そう言えば私と電は建造されてから研修しかしてないから練度が低いのだけど、任務とかはどうなってるの?」
「そうですね。演習は希望制なので、執務室に書類を出してもらえれば受けられます。最初は簡単な遠征任務からでしょうかね。任務とは別に平日は座学がありますから後程教室へ案内しますね」
　暁型三番艦の雷よ。かみなりじゃないわ。今は横須賀鎮守府の旅行中よ。建造されたばかりで練度は低いけど皆に頼ってもらえるように頑張るわ。
「響はどうなの?」
「私も練度は低いよ。佐世保にいるときに遠征を少しした位だね」
「吹雪ちゃん、暁ちゃんはどのくらいなのです?」
「暁さんですか?暁さんは現状計測出来るものを越えています。エラーになっちゃうんですよね」
「ハラショー!」
「凄いのです」

「それは凄いわね。私達も頑張って追いつかないといけないわ」
「おっと、ここが広報室になります」
　青葉さんか、トラックにいるときには話した事ないのよねぇ。良い人だといいのだけど。
「新人さんですね、恐縮です。取材いいですか？」
「そんな事より青葉さん！貴女って情報通なのよね？」
「そんな事・・・・・って情報通？まぁ、いつも新聞のネタ探しをしてますからいろいろと知っていることは多いと思いますが」
「暁ちゃんの事を教えて欲しいのです」
「へっ！あっ暁さんですか？」
「そうなの、私達姉妹艦だから長女の事が知りたいの」
「暁さん、暁さん。・・・・・・あ、あぁぁぁぁ」
「青葉さん？」
「あっ暁さん止めてください。青葉のお尻が、青葉のお尻が割れてしまいます。縦だけじゃなく横も割るつもりですか・・・・・・助けて、古鷹、古鷹ぁ！」
　どうしたのかしら、壊れたオモチャ見たいにカタカタしてるわ。お尻って何？横に割るってなんなのよ。暁は青葉さんに何したの？響も電もひいてるわ。吹雪は苦笑いし

てるわね。何か知っているのかしら。
「吹雪は何か知っているの?」
「少し前に青葉さんが、暁さんの記事を書いたのですが内容がまったくの事実無根で、怒った暁さんがお仕置きでお尻ペンペンをしたんですよ」
「・・・・・・痛そうなのです」
「それで青葉さん、中破しまして・・・・・・・」
　お尻ペンペンで中破ってどういう事? 研修でならったわよ、受けたダメージで小破・中破・大破・轟沈ってね。青葉さんは重巡だから私に比べてバルジがあるはずなのにそれでも中破って私達駆逐艦が受けたら轟沈かしら? 電、今お尻隠しても何にもならないわ。暁を怒らせたらいけないってことが分かったけど他の情報はないのかしら? ダメ見たいね。青葉さん、もう話が聞ける状態じゃないわ。
「吹雪次に行くわよ。何処がいいのかしら」
「次は食堂にしましょうか? 誰かしらいると思いますし、いなくても間宮さんから話を聞いたらいいですしね」
「決まりよ。行きましょう」
　食堂か、トラックのカレーは美味しかったわね。確か艦娘達で大会を開いて一番美味しかったレシピで一年間毎週金曜日に出るのよね。ここでもやってるのかしら?

「ねぇ吹雪、カレー大会ってここでもやってるのかしら?」
「やってますよ。今週締め切りで、来週末に大会があります」
「そうなの?ちなみに誰のレシピなの?」
「暁さんです。というか、ここに移動になってからずっとレシピは暁さんのものです」
「同じレシピなの?」
「違います。毎年進化してます。私は暁さんが建造されてからずっと暁さんのカレーを食べてますよ」
　トラックの暁は『料理はレディのたちなみよ』って噛んでたから出来ないのは分かるけど、ここの暁は料理も出来るのね。
「まさか、暁が料理出来るなんて・・・・・」
　どうしたのかしら、なんか響がショックを受けてるわ。佐世保で何かあったのかしら。あれが食堂かしら大きいわね。さすが大本営の横須賀鎮守府だわ。
「間宮さん、鳳翔さんこんにちは」
「あら吹雪さん、そちらは新人さんですね」
「響だよ。よろしくお願いするよ」
「雷よ。これからお世話になるわ」
「電なのです。よろしくお願い致します」

「暁さんの姉妹艦の方々ですね。よろしくお願いします。今日の夕食は期待しててね！腕によりをかけるわ。そうだ暁さんから頼まれてたの、ちょっと待っててね」

暁からの頼まれ事って何かしら?間宮さんだから変なことはないだろうけど。

「座って待ちましょうか」

「そうね。でも人がいないけどどうしたのかしら?」

「この時間は座学や演習、そして任務で皆さんいないんですよ。私は三人を待っていました」

「私達を?」

「ええ、私は横須賀鎮守府の風紀取締役なので、皆さんにお話しないといけません。規則自体は他の基地と変わりませんが、あまりにひどいと相談役からお仕置きされますので気をつけてくださいね」

「相談役ってもしかして」

「暁さんですよ」

やっぱり。青葉さんを見てるから気をつけなくっちゃ、それにしても電、今お尻を押さえても意味ないわ。あっ響もなの?まったく二人共しっかりしてよ。

「タバコやアルコール類は酒保で販売してますが、嗜む程度にしてくださいね。タバコは喫煙部屋が工廠脇にありますがおすすめはしません。アルコール類は夜になれば私

のお店でも飲むことができますが時間が決まってますので注意して下さいね」
「私はタバコもお酒も嗜まないから大丈夫よ」
「電もなのです」
「私はお酒は飲むけど、注意するよ」
「タバコは百害あって一利なしですから良い事です」
「艦娘がタバコって聞かないけど誰か吸うのかい？」
「暁さんだけです。だから酒保に置いてあるのも暁さんの吸う銘柄だけですね」
　暁がタバコ吸ってるの？不良になっちゃったのかしら？これはどうにかしないといけないわね。
「止めさせられないの？」
「ダメです！そんな事をしたら大変な事になります」
　吹雪が大きい声を出すからビックリしたわ。大変な事って何なのかしら？
「大変って何があったんだい？」
「暁さんが建造されてすぐの頃だったんですが、妖精さんを焚き付けたんです」
「妖精さんの乱のことだね」
「それだけなら良かったんですが、イライラするからちょっと出てくるって言って新海域を解放してきたんです。意味が分かりませんよ。新規建造艦が単艦でやったんです

よ!・返り血まみれで笑いながら壊れちゃったって錨を見せるんですよ!・装備を聞いたらドラム缶しか装備してないし、ドラム缶には資材が一杯入ってるし、提督だった元帥にこの資材やるからタバコ買ってこいってパシらせるし、あの時の後始末大変だったんですよ!」

何やってるのよ暁は、私と本当に同じ艦娘なのかしら?・あら、電がプルプル震えてるわ。ちょっと可愛いわね。響は唖然としてるわね。タバコって怖いわね。立派なニコチン中毒だわ、暁は手遅れね。

「大きい声を出して、どうしたんですか?」

間宮さんが戻ってきたけど、お盆の上のその大きいのは何?・

「鳳翔さんから話を聞いてたら、暁のタバコの話になったの」

「止めた方がいいんですけどね。暁さんは無理でしょうね。だからといって三人がタバコを吸っていい理由にはなりませんからね」

「はぁ〜い」

「ところで間宮さん、お盆のそれは何なのです?・」

「暁さんから三人への着任祝いよ」

「あれ、私も?・」

「ええ、『案内ありがとう吹雪』だそうですよ」

「ずるいですよね」
「さぁ、間宮特製特盛あんみつです」
「すごい大きいのです」
「ハラショー」
すごいわ、量もだけど下がアイスになってる、その上に小豆やフルーツ、これでもかって生クリーム。頂点にチェリーが乗ってるわ。あっ、凄く美味しい！暁も粋なことをしてくれるわね。でも、今これだけ食べてお夕飯食べれるかしら？
結局夜になっても暁は戻って来なかったけど、いろんな人から暁のことが聞けたわ。すっごく皆から頼りにされてるのが分かって私も鼻が高いわ。そんな暁に頼ってもらえるように頑張らなくっちゃ！

# ストーカー?

「帰ろう・・・・・・」

徹夜明けでしんどい暁だ。もう無理眠いぞ。部屋に帰って寝よう。昨日は那珂のレコーディングをしたあとさっきまで編集をしてたんだ。次は那珂の曲を一般公募とかどうだろうか?全部そいつに丸投げで、そもそも何で素人の俺がやってるんだろうか?プロを雇えよ海軍!それに昨夜は姉妹艦達の歓迎会だったんだぞ。響には会ったけど、雷と電にはまだ会ってもいない。畜生!この世界に来てから何かしらに巻き込まれてる気がする。休みや給料がないって聞いて妖精さんにストライキ起こしてもらったり、お金がなくてタバコが買えないから資材集めて交換してもらおうと、取れる場所を大淀に聞いて出撃任務にしてもらって、その時は砲や魚雷の使い方が分からなかったから艤装に付いてた錨で深海棲艦をしばきながらドラム缶に資材集めて帰ったら吹雪に怒られたり、うん、あのときは敵の艦載機に苦労したな、全部避けたけど、後は給料をピンはねしようとした海軍大本営に殴り込みしたりしたな、戦艦とかも陸じゃたいして強くなかった。他にもいろいろあったな。あっ!これ、自業自得じゃね?いけない、ネガティブ思考だ。深呼吸しよう、今の俺は疲れてるんだ、ＯＫ!俺は悪くない。悪いのは

給料払わなかった海軍だ。それにしても・・・・・・見られてるな。なんだろう?よし、自然な動作で確認だ。鎮守府内だから艦娘だろうけど、あれは響か。横の茶髪は誰だ?それともう一人いるな。もしかしてあれが雷と電か?どっちがどっちってのは分からんけど、茶髪かぁ、響は綺麗な銀髪だったから姉妹艦で髪色違うのは分かるけどね。陽炎型の不知火とか髪の毛ピンクだしな。挨拶した方が良いんだろうけどどうしようか?

「ん、暁さんか、どうした?」

悩んでると大戦艦長門が現れた。選択肢は、戦う、逃げる、捕らえる、アイテムを使うの4つだ。何考えてんだ俺は、何で戦うんだ?アイテムって何使うんだ?ここはとりあえず捕らえるか?アホか俺は!う~ん、疲れてるな。

「いや、見られててな。どうしたもんかと考えてたんだ」

「あぁ、あれか。昨夜もいろいろ暁さんのことを聞いて回ってたから気になってるんだろう。ようやく揃った姉妹艦だ、仲良くしたら良いじゃないか」

「仲良くしようにも、あれじゃなぁ。って話を聞いて回ったって?」

「あぁ、最終的に元帥からいろいろ聞いてたみたいだぞ」

「ヘタレが元凶か・・・・・・何を聞いたら姉妹艦がストーカーみたくなるんだ?」

「いや、私に聞いても分からんよ。っていうか何か漏れてるぞ。どす黒い何かが漏れて

るぞ」
　いや～、寝る前に殺る事が出来たみたいだ。いや、本当に疲れてたのにな。徹夜しなきゃいけなくなったのも、もともとあのヘタレが那珂のプロデュースしろって言ったからだしな。
「お、おい、落ち着くんだ。暁さん！」
　どうした長門？顔がひきつってるぞ。
「大丈夫だ、姉妹の前で取り乱すような事をするわけないだろう」
「本当に落ちついたんだな。元帥を殴りにいこうか！とか考えてないな？」
「そんな事より眠気の方が強い。徹夜明けなんだ」
「那珂の方の仕事だったか、お疲れ様。那珂のおかげで艦娘の認知度が上がったから軍自体も無茶なことが出来なくなった。これも暁さんが那珂をプロデュースしたからだな」
「俺は給料分の仕事をしただけだ。有名になったのは那珂が頑張ったからだろう」
「ならばそういうことにしておこう」
　微笑ましいものをみたような顔をするな、さっきまでひきつってたくせに。
「そう言えばあの三人、午後から遠征に出るそうだぞ」
「はぁ？雷と電は昨日着任したばっかりだぞ」

「本人達の希望だそうだ、早く姉に追いつきたいってな。元帥が許可した、随伴は確か天龍、龍田、睦月だよ」
「なら大丈夫だろ、あいつらの練度は低いって聞いてるから行っても近海だろうしな」
「そうだな、まぁ、出発の時に暁さんの代わりに無理するなと言っておく」
「よろしく頼むよ」
　その時俺は寝てる間にあんな事が起こるなんて思ってなかった。ってフラグか？
やっぱり疲れてる寝よう。

# イ級とブースター?

「うるさいな・・・・・・」
　寝起きの暁だ。外がうるさくて起きちゃったぞ。まったく何の騒ぎだ?とりあえずシャワー浴びて着替えよう。
「それで、結局何があったんだ?」
　目の前で地面に正座した明石と夕張が項垂れている。そんなに答えにくい事やったのか?
「何があったのかと聞いてるんだが?」
「はい、実は最近レンタルで借りたアニメ作品に登場した使い捨てブースターを開発しまして」
「名前はＳＫブースターです」
　明石と夕張が交互に言ってるが、嫌な予感がする。
「名前なんぞどうでもいい。何があって騒いでいたのかを答えろ!」
「そのブースターを試してくれる艦娘がいなくて、イ級ちゃんに頼んだのですが・・・・・」
「出力設定を間違えましてイ級ちゃんがすっ飛んで行きました」

「さっさと探してこい！」
「えっ！でも・・・・・・」
「ああ？」
「はい、すぐに行って来ます」
　イ級よ強く生きろ。俺はメシを食う。食堂へ行こう。
「弥生か、珍しいな一人でどうした？」
「卯月は補習を受けてます。他の姉妹達も用事があるって」
「ふ～ん、ならちょうどいい。弥生、アイス食べるか？」
「えっ！いいんですか？」
「定食のデザートだから小さいぞ」
「暁さんはいつもくれるけど甘いの苦手？」
「ああ、好んで食べたいとは思ってないな。だからいつも食べてくれて助かる」
　弥生は感情を表すのが苦手な娘だ。でもアイス食べてる時の顔は凄い。数少ない俺の癒しでもある。でもあんまり食べさせ過ぎると間宮に怒られるから注意が必要だ。弥生と卯月はもともと別の基地所属の艦娘だった。初めて会った時は二人共営倉の中にいたんで驚き話を聞いたら生意気だと暴力を振るわれここに入れられたと言っていた。たまたま任務で行った先だったがいわゆるブラック基地というやつだと気づき、妖

精さんにいろんな証拠を探してもらい、元帥に連絡をつけて関わった人間は処された。二人は俺が連れて帰った、みんな最初は驚いていたが話を聞いて二人を受け入れてくれた。二人もここに来て立ち直ってくれたみたいだ。それにしてもこの甘やかしたくなる感情は何なんだろう、もしや父性というやつか?いや、今はロリボディになってるから母性か。そんな顔してどうした弥生?俺の後ろに何かいるのか?

「暁さん、前にも言いましたよね?」

「あっ、はい」

間宮がいた。まずいぞ。逃げ場がない。

『緊急放送!戦闘が出来る艦娘は至急工廠へ!それ以外はシェルターへの避難を!緊急放送!戦闘が出来る艦娘は至急工廠へ!それ以外はシェルターへ!』

警報と放送が凄い。何があったんだ?

「すまん間宮、行ってくる。弥生の事頼むな」

「分かりました」

「大丈夫だ、そんな顔するな弥生。お前は卯月と一緒に間宮達を守ってくれ」

「はい」

「んじゃ、行ってくる!」

本当に何があったんだろう。訓練じゃなさそうだしな。寝る前のあれがフラグった

のか？

# カム着火インフェルノ！

「明石より緊急入電がありました。遠征に出ていた天龍達の艦隊がル級を含む敵の十二隻の連合艦隊と交戦、その際旗艦天龍が中破、夕張と龍田で殿を務め撤退中との事です。敵はこちらに交戦しながら近づいています」

　警報が響いてるので真面目モードの暁だ。艤装もちゃんとつけてるぞ。天龍がヤバいみたいだ。そうすると練度の低い姉妹達もヤバいってことだ。

「吹雪よ。俺は先に行く」

「分かりました。こちらは天龍達の救援部隊と最終防衛部隊を編成次第出撃します。改二発動の許可も出ていますが無理せずこちらに回してください」

「了解。暁！出る！」

　工廠にある夕張特製強制射出システムを使い一気に加速する。これ、Ｇ　が凄くて気持ち悪くなるから使いたくなかったがそんな事も言ってられない。とりあえず妹達を傷つけるやからは俺が殲滅する。でもちょっと待って、やっぱり気持ち悪い。

「すまねぇ、ドジっちまった。半分は倒したんだがな」

天龍の言葉で、俺は我に返った。龍田、夕張、天龍大破。明石がかろうじて小破。睦月、響、雷、電は中破している有様だ。
「イ級はいるか？」
「ここにいますが、睦月ちゃんをかばって轟沈寸前です。私の泊地修理が使えればなんとか助けられるかもしれませんが、その為には鎮守府に戻らないと」
「分かった。もうすぐ救出部隊がくるはずだ。明石には俺の無線を渡すから連絡を取り合え、動ける奴は動けない奴に手をかしてやれ」
そう言って明石に無線を渡した。
「暁さんは？」
「俺か？ちょっと挨拶してくるよ」
「無茶です！相手はまだ六隻の一艦隊が残ってるんですよ！」
俺は夕張と明石に改造してもらった艤装に付いてる錨改め『いかりくん四号』を構える。
「なぁ明石、俺はさ、仲間や妹達を傷つけられて黙ってられるほど大人じゃねぇんだ」
今の俺は激おこだ。違うな、カム着火インフェルノォォォオウ！だ。今の俺は誰にも止められん！
「いくぞ！暁改二！」

中破して身体がいうことを効かない睦月です。今は雷ちゃんに肩をかしてもらってます。いきなりイ級が出てきて睦月を庇ってくれたおかげで中破ですんだにゃ、このイ級は暁さんのペットだと明石さんが教えてくれました。轟沈しないか心配にゃしい。明石さんがイ級を曳航して先に帰還して行ったけど睦月達は救援部隊を待つことになりましたにゃ。睦月は暁さんが戦闘するところを見るのは初めてにゃしい。だから敵艦隊に向かって行った暁さんが心配にゃ。と言うかあれは本当に暁さんなのかな？改二実装したら、黒いコート姿になってる。あれ？敵の砲弾がすり抜けてるように見えるんだけど全部避けてるの？まるで散歩してるみたいに近づいてってるんだけど！

「オラァ！」

飛び出して来たイ級を棍棒みたいなのでフルスイングして吹き飛ばしてる。あぁ、飛んでったイ級がチ級を巻き込んでる。魚雷を手に持ってどうするって投げた！チ級の魚雷にぶつかって凄い爆発！およ？もう一体のチ級も敵の旗艦のル級もヘ級も爆発してるいつ魚雷を打ったの？ル級はもう一体のイ級が庇ったみたいだけど天龍さん達が苦労した敵艦隊がもうル級しかいない。

「凄い！」

雷ちゃんが唾を飲み込んでる。響ちゃんも電ちゃんもあっけに取られてるにゃ。加賀さんが、「鎧袖一触よ」って言ってるけどまさにそれを見てる感じにゃ。
「ご無事ですかみなさん？」
「神通さん！」
「助けに来たけど、もう終わりそうね。貴女達も見ておきなさい、めったに見れるものじゃないから」
「いや～暁さんの改二ってひさびさじゃない？」
「そうですわね北上さん」
暁さんは肩の探照灯を超至近距離でル級に向かって照射して目を潰すと棍棒でル級を殴り付ける。そして魚雷を放って止めを差したにゃ。うん真似できない。本当に暁さんは駆逐艦なのかにゃ？
「やっとついたか、ん、終わっていたか」
長門さん？神通さんに北上さん、大井さんと来て長門さんまで？救援部隊のはずだよね？他は誰が来てくれたんだろう。
「皆さん先に行き過ぎです！」
「暁さんがいるのだからそんなに急ぐこともないでしょうに」
赤城さんと加賀さん？救援部隊ってどんな人選だったんだろう。

「凄い面子だな、どっかに戦争にでも行くのか？」
　暁さんが戻って来たにゃ。改二を解いていつもの格好に戻ってる。
「まぁいい、一航戦の二人は艦載機を発艦。索敵と護衛をしろ。それと潜水艦対策はどうなってるか教えろ。長門は龍田と天龍の曳航、あと吹雪と連絡を取れ。こっちは囮の可能性ありだとな。神通は睦月の曳航。北上と大井は響、雷、電の曳航を俺と一緒にやれ」
「了解」
「対潜は、鎮守府の潜水艦達が哨戒しています」
「吹雪に追加連絡、動ける水雷戦隊で対潜の哨戒強化」
　暁さんは凄いのね。普通なら戦艦の長門さんや一航戦のどちらか、というか救援部隊はみんなして旗艦やれるんじゃ？そんな人達に指示出ししてさらに総旗艦の吹雪さんにまで連絡指示してる。さっきまで戦闘してたんだけどにゃ、もしかして考えながら戦闘してたとか？
「神通さん、睦月をお願いね」
　そんなことを考えてると神通さんが睦月を曳航するのに近づいてくれた。肩を貸してくれてた雷ちゃんは睦月の事を神通さんに預けると暁さんに向かって一直線にゃ。ちょっと羨ましいにゃ。

「神通さん、ごめんなさい。睦月はもう限界です」
「大丈夫ですよ。休んでください」
はぅ～睦月は気が抜けて眠くなってきたにゃ、ちょっとだけお休みなさい。

おぅ、暁だ。久しぶりの戦闘は疲れたぞ。深海棲艦の奴らは何かの目的があって今回の攻勢に出たはずだ。空母を編成してないのも何かの意図があってのことだろう。それが何かだが、
「ぐふぁっ！」
何かが腹にっ！敵は殲滅したはずなのに・・・・・・
「暁ちゃんっ！電は電は怖かったよ～」
ふぇ～ん、と泣いてしまった。敵じゃなくて良かった。しかし腹が痛い。泣きながら顔で腹をグリグリするの止めてくれないかなぁ。
「うぐっ」
今度は右脇腹に、これは雷か？まったく困った妹達だぜ！
「ふぎゃ！」
左脇腹もだと・・・・・・うん、分かってた。響もだね。正直言うと、深海棲艦相手

に無傷だったのに中破の妹三人によってダメージ貰うとは思ってなかったよ。
「大丈夫だ。さぁ、帰ろう」

# 去らばイ級！

「何で治らないの？」

工作艦の明石です。試作のＳ　Ｋブースターで飛んで行ってしまった暁さんのペットのイ級ちゃんを探していたら遠征任務中の天龍さん達が戦艦ル級含む連合艦隊に襲われている場面に夕張と一緒に遭遇しました。無線で連絡後、天龍さん達と協力して半数を撃破までは良かったんですが、皆さん大破や中破で戦闘継続不可能な状況に追い込まれ、航行不可能状態の睦月ちゃんが魚雷に狙われた時いきなり現れたイ級ちゃんが睦月ちゃんを庇って轟沈寸前になってしまいました。その後増援の暁さんが来なければもっとひどい状況になっていたでしょう。その場は暁さんに任せイ級ちゃんを曳航して鎮守府に戻ったのはいいんですが傷が治りません。以前はこれで治っていたのですがどうしたらいいか分かりません。

「明石どうだ、治療できそうか？」

「分かりません、以前はこれで傷が治っていたんですが今回は治らないんです」

暁さんからの報告を受け日本全土にイエローアラートが発令され、各基地はスクランブル状態になりました。今の鎮守府にはほとんど艦娘がいませんが、皆さん暁さんの

ペットとはいえ深海棲艦が艦娘が庇ったという事例に驚きを隠せませんでした。しかし、総旗艦である吹雪さんに諭され心配そうにイ級ちゃんを見守ってくれています。あとは、私が頑張らないといけないのに手の打ちようがありません。自分の無力さに涙が出てきます。

「戻ったぞ、元帥状況はどうなってる?」

「全土にイエローアラートを発令したよ、各基地はスクランブルで哨戒に当たらせてる。今の所新しい情報は上がってきてないから、救援部隊は補給後待機してくれ。天龍達はドックへ、申し訳ないが、中破の四人はその後にはいってくれ。バケツの使用許可は出したから使ってもらってかまわない」

「了解。それでイ級はどうだ?」

「それが治らないんです。いつもはこれで治っていたのに今回ばかりはどうも出来ないんです」

「そうか・・・・・・でも最後まであきらめないでくれ、こいつは睦月を、仲間を守ってくれた。いや、俺達の立派な仲間の一人なんだ。バケツを使ってるから夕張もいずれ戻る。一人でダメなら二人、それでもダメなら俺も手伝う。といっても俺に出来るのは資材を集めてくる位だけどな」

「睦月も手伝うにゃ!この子は睦月を庇ってこんな目にあってる。だから助けるのは当

たり前にゃしい」
「電も手伝うのです。電は敵でも助けたいのです。この子が仲間ならなおさら助けないといけないのです」
「私だって手伝うわ、ちゃんと頼ってよね！」
「うん、仲間なら助けないといけない。沈ませる訳にはいかない」
「お前達、俺はこのイ級を誇りに思う。過去は敵だったかもしれない、でも今は仲間を助ける為に身を投げ出す献身。そんなことを出来る奴を俺は知らない。そして、そんなこいつを仲間と呼んでくれるお前達に礼を言いたい、本当にありがとう！」
　あの暁さんが頭を下げて睦月ちゃんと姉妹艦の三人に礼を言っています。私も含め周りで見ていた者達も驚きが隠せません。そしてこちらを向くと私にも頭を下げました。
「すまない明石、こいつを連れてきたのは俺だ。我が儘かもしれないがよろしく頼む」
　あぁ～もう、こんなことになったらやるしかないじゃないですか！泣いてる場合じゃありません。やってやる！やってやるぞぉ――！
「お任せください。最後まであきらめない！」

鎮守府に戻って来た暁だ。睦月や姉妹達がイ級を仲間と呼んでくれてすっごい感動してる。年を取ると涙脆くなるなぁ。明石もやる気になってくれたみたいだし、あとはイ級が元気になってくれるといいな。遠征もあいつが荷物係をしてくれるからいつもより多く持ち帰れるんだよね。俺にとってはいなくてはならない相棒だ。明石がいろいろとイ級の状態を見ながら治療をしている。俺は見守るしかない。

「暁お姉ちゃん、イ級ちゃんが!」

電がお姉ちゃんって呼んでくれた。嬉しいぞ。なんて考えてる場合じゃねぇ。イ級の身体が輝きながら透けてきたぞ。

「これでもダメなの!」

「イ級ちゃん!行っちゃダメー!」

睦月が泣きながらイ級にすがりつこうとするが身体をすり抜ける。

「あぁ・・・・・・ダメにゃしい。イ級ちゃん!」

イ級の身体から黄金色の光が溢れて明石と睦月ごと光に包まれてる。明石と睦月ごと?大丈夫か、明石、睦月!光が徐々に薄くなる中聞き慣れない声が聞こえた。

「睦月ちゃん、無事で良かった」

そこにイ級はいなかった。立ち尽くす明石と座り込んだままの睦月と見慣れない女の子。誰?

「貴方が私の司令官ですか?如月と申します。おそばにおいてくださいね」
如月?誰?それよりもさっきの光は?イ級はどうなった?
「如月ちゃん?」
「うふふっ、如月よ。睦月型二番艦の如月。睦月ちゃん、この姿で会えて嬉しいわ」
「まさか、そんな!」
何か知ってるのか元帥?それよりも睦月型二番艦って、今まで顕現してなかったはずだ。建造でもなくいきなり現れるとはどういうことだ?周りもポカンとしてるぞ。
「元帥!どうなってる?何か知ってるのか?」
「あ、あぁ、今まで仮説でしかなかったんだ。こうして目の前で立ち会うとは思ってなかった。詳しい話は執務室でするから、吹雪と暁、明石それと如月だったか?お前達四人は執務室に来なさい。他の者達はまだスクランブル中だ、待機の者はそのまま待機で、睦月や第六駆逐隊の三人はドックへ行きなさい。それではこの場は解散」
皆、納得いかない顔でぞろぞろと動き出したな。さて妹達は、睦月もか。動かないな。いや動けないってのが正しいか・・・・・・
「響、雷、電、睦月!あとで教えてやるから今は傷を癒してこい。」
「お姉ちゃん!分かったのです。睦月ちゃん、響ちゃん雷ちゃんも行こう」
電が最初に動いたか・・・・・・残りの三人もしぶしぶ行ったな。さて、俺も行くか。

さっさとこのもやもやをどうにかしないと、イ級のことも聞かないとな。

# 艦娘の秘密？

「明石はまだか、ところで暁は何でそこに座ってるんだ？」
鎮守府内喫煙スポット執務室を満喫中の暁を注意したい元帥です。不相応な地位についてしまい元帥などと呼ばれてるけど、五年前の赤紙で提督になった元一般人です。一応、執務室は応接室もかねてるから喫煙可能ではあるけど執務机に座るのはどうかと・・・・・・まぁ、こちらに迷惑にならないように窓開けて吸ってるからいいのか？
「吹雪～、俺にも茶ぁくれ～」
「自由過ぎる。如月はあんなになっちゃダメだからな。睦月を手本にするんだぞ」
「うふふっ、暁さんが自由人なのは知っているわ」
やっぱり仮説通り如月は元イ級なんだろうな。これが立証されたら戦えなくなる艦娘が増えるだろう。どうしたもんか頭が痛い。暁ならいい案を出してくれると思うけど、海軍のトップとしてはどうなんだろう。暁は建造当初から今の暁だ。普通の暁じゃなくて苦労したなぁ。妖精さんの乱と呼ばれるストライキは当時の国会議員、官僚、経済連、軍上層部の悪業を全て妖精さん達に調べさせて、それを使って無理矢理法律を作らせるという力業で、周りは凄く大変そうだった。当時いたのは新設された柱島泊地で

妖精さんの数も少なく艦娘も吹雪と暁だけだったから書類もそこまで多くなかったし、後から暁が主導したと妖精さんから聞いて理由を問い質したらタバコが吸いたかったからと言われ頭を抱えた記憶がある。この真実を知る者は少ないけど、暁のタバコに対する情熱は何なんだろうか?救いは周りがタバコに対し風紀を締め上げてるから伝播しないことかねぇ。

「元帥?お茶いれましたよ。どうしたんですか変な顔して?」

辛辣ぅ～吹雪ももうちょっと優しくしてほしいです。

「いや、昔を思い出してたんだ」

「気をつけろ如月。変な顔してる時はエロいことを考えてるからな」

暁ぃ～やめて!新人さんに変なこと言わないで、エロいことなんて考えてないからね。

「えっ、ふ～ん、如月はいつでも大丈夫ですわ」

やめて、吹雪の目が笑ってるのに笑ってないから!

「へー」

棒読みだ。怖いコワイコワイ・・・・・・

「エロいことなんて考えてないから、俺には吹雪しかいないからね」

「そんなこと言いながら人のパンツは被るけどな」

やめて暁！これ以上燃料投下しないで吹雪のゲージはもう満タンだから！超必殺技が発動しちゃうから！

「な～んちゃって！」

えっ、どういうこと？如月が暁とニヤニヤしてる。はめやがったな暁。

「そう言えば、妹達がストーカーみたくなってて、昨夜元帥がいろいろ言ったせいだという証言があったんだがどういうことだ？」

「確かに三人と話はした。暁が大本営に殴り込んだ時の話をしてほしいと三人に頼まれたからな。なんか不味かったか？」

「内容次第だろう、じゃなけりゃストーカーみたくはならない。そもそもその場にいた長門がいるのに何でお前が話した？」

実際、酔っててあんまり覚えてないんだよな。確か当時の最高戦力である大本営の第一艦隊の長門・陸奥・扶桑・山城・伊勢・日向を突破し、上層部を捕まえ妖精さんの乱で調べてあった悪事を大本営発信で国中にばらまき体制を崩壊させ、それと同時に官邸に圧力をかけて体制をすげ替えたって話をしたはずだが・・・・・あっ！

「駆逐艦でありながら戦艦六隻無傷で仕留める鬼畜艦って言った気がする」

「誰が鬼畜艦か！だいたいやりあったのは武蔵だけであとは、妖精さんがやったんだぞ」

「いや、武蔵とやりあってるだけでもおかしいから、武蔵のプライドぼろぼろだよ」

「陸の上なんだから問題ないだろう。人間だって艦娘を襲うアホがいるんだから」
「出来るのはお前位だ。吹雪なんか可愛いもんだぞ」
「元帥?」
「あっ！いや、ち、違う。今の無しで、ごめんなさい」
　失言だ。吹雪が怖い笑顔になってる。助けて暁！窓の方向いて新しいタバコに火をつけやがった。如月は?知らないふりしてお茶飲んでるぅ。明石ぃ！早く来て、元帥を助けて！

「とりあえず元帥が原因なのは分かった。妖精さんから話してもらうか」
　もくもく中の暁だ。転生者として生きてる。元帥が吹雪に折檻されてるが無視だ。鬼畜艦ってなんだよ。物心ついた頃から武道やってればなんとか出来るに決まってるだろう。身体がちっちゃくなって力は元の身体以上だったから調整するのが大変だった。でも戦闘しなきゃいけない世界に放り込まれたらやるしかないだろう。元いた世界で『艦隊これくしょん』というものは知っていた。幼なじみが良く話してくれたからだ。だからと言って俺自身がやっていた訳じゃないので内容はほとんど聞きかじりだ。こんなことになるならやっておけば良かったと何度か後悔したこともある。今がそん

な状況だ。元帥は仮説って言ってたけど、これはあれだ。にわとりが先か卵が先かってやつ。まぁ、深海棲艦が先なんだが。
「遅くなりました！って何で元帥がぼこぼこになってるんですか？」
「もとからです」
　ええ！吹雪、それでいいのか？
「えっ？」
「もとからです」
「はい」
　あきらめたか、そうだよな吹雪怖いもんな。さすが国を代表する鬼嫁艦だ。
「元帥、起きて下さい。明石さんも来ましたよ」
「あれ、凄く顔が痛いんだけど何があったんだっけ？」
「気にしなくて大丈夫です。それじゃ仮説でしたっけ？お話をお願いします」
「そうだった、お前達は艦娘の起源を知ってるか？」
「かつての軍艦の船魂が擬人化したってことですか？」
「違うよ。最初の五人と呼ばれる、吹雪・叢雲・電・漣・五月雨の事だよ。彼女達はある日突然海の上にいたらしい」
「深海棲艦が現れてから一年たったくらいの話でしたっけ？」

「そう、最初の五人が艦娘の起源。それから姿を現した妖精さん達が建造ドックを作り、艦娘の建造・配備が始まった」
「最初の五人は、深海棲艦から艦娘になった個体ってことか?」
「研究者達の見解はそうだと言われている」
「ならそう言う事例がもっとあってもいいのでは?」
「だから仮説だと言っている。今までそう言う事例の報告はない。もしかするとあったのかもしれないが、前の大本営が握り潰していたのかもしれない。仮説通りなら艦娘達に自分達の同胞を撃てと命令することになるからね」
　吹雪と明石が息をのむ、そりゃそうだ。かつての自分の仲間だったかもしれない相手を今まで撃ってきたと言われたのだから。艦娘は建造で顕現するときにかつての船の記憶を持って産まれる。当然仲間意識、姉妹艦の意識が強い。そんな艦娘がやってきたことがいくら自分達を撃ってくる相手とはいえ同士撃ちをしてきたと考えればその思いは想像に及ばない。俺には暁の艦としての記憶がない。多分暁という船魂の代わりに俺という魂が入り込んでしまったからだろう。もちろんこの世界に来てすぐに資料を漁って記憶した。それから誤魔化しながら生きてる。結構キツイが慣れた。自分の誓いの為にも簡単に死ぬわけにはいかないし、それはこれからも変わらない。
「僕はこの仮説を公表はしない。社会的に人間が敵に回ってしまうからね。でも戦いた

くなくなったのなら言って欲しい。無理矢理戦場に君達を送りたくないからね」
元帥は俺達に真面目な顔で言いきった。でも吹雪と明石は考えているようで何も答えない。
「俺は公表した方が良いと思う。もちろん時期は考えるが」
その場にいた全員が俺の方を驚いた顔で見てる。まぁそうなるな。久しぶりにまともな元帥の意見に反対してるんだしな。聞きかじり程度の記憶しかないがなんとか話す事くらい出来るだろう。怖いのは一つの意見で今後が決まってしまうことだ。
「何故だい暁？」
「理由は後から話す。まず如月に聞きたい、イ級だった時の記憶はあるか？」
「少しくらいですね、でも何故あんなにも憎しみに囚われていたのか分からないんです、暁さん達との楽しい思い出は少しは覚えてる。そして睦月ちゃんが危ないって思ったら身体が勝手に動いてたのも覚えています」
「そうか、やっぱりな。元帥、今から言うことは俺の推測でしかないが反対する理由に繋がってると思って聞いてくれ」
「分かった。聞こう」
「まず深海棲艦と艦娘についてだが、これは元帥が話した仮説通りだと思う。そこには決定的な差があるんだ。これは深海棲艦が憎悪や絶望や破壊というマイナス、艦娘が愛

好や希望や守護というプラス。同じ存在でも在り方が真逆だ。これが差なんだと思う。如月はイ級の時はマイナスだったんだろうが俺達と触れ合っていくなかで徐々にプラス方向へ向かって行った。最後に守護というプラスの領域に入った事で艦娘として顕現したんだと思う」

「そう聞くと納得出来るな」

　みんな頷いてる。良かった間違えてはいないみたいだ。ここからが本番だから気をつけないと。

「公表した方が良い理由だが、今言ったことを考えれば分かると思う。深海棲艦がマイナスを持って産まれてくるのなら多分この戦争は終わらない」

「なんだと!」

　いきなり大きな声を出すな元帥!ビックリするだろうが!

「考えれば分かるだろう!この地球という星でどれだけの憎悪や絶望が海に沈んでると思っているんだ?」

「なっ!」

「艦娘がプラスを持っているのは多分、かつての艦艇が沈んでいくなかでも希望や護りたいという思いがあったからだろう。だが今の状況のこれは人間の欲望が産み出したものがつもり積もって出てきたものなんだと思う」

「人間の・・・・・・欲望の成れの果ての産物が深海棲艦ということか?」
「そうだ、だから深海棲艦は人間達に牙を向く。そして人間を守護する艦娘にもだ。深海棲艦達が海洋生物を襲うなんて話は聞いたことないしな」
「だが、今の話では人間達は艦娘達を迫害することになるぞ」
「視点の問題だ。人間のせいで深海棲艦が産まれたという事実を浸透させれば、艦娘が同じ産まれであっても迫害はされない。何故ならそんなことをすれば艦娘が敵に回る。そして人間を守護するものはいなくなり結果人間は滅びる。そんなことがわかっていながら迫害するものはいないだろう?」
「一般人から理解させるようにしなくてはいけないということか?」
「そうだな、時間はかかるが一番上手く行くだろう。それと今の話の裏付けは、前の大本営の時に無理な進軍や捨て艦をやった海域や、過去の歴史で海戦が行われた海域は深海棲艦が多いと思うからデータを洗ってみると良い。そのデータがあれば各基地で提督の出世の為の無理な進軍等も減るだろうし、隠蔽してもある程度分かるようになる」
「暁の話は推測ではあるんだろうが正解なんだと思う。だが時間がかかりすぎる、その間うちの艦娘達にはなんて言うんだ?」
「負の感情に囚われている仲間を救う。艦娘として顕現すれば文句無しだが、これ以上手を汚させない。沈める事もまた救いのはずだ」

「綺麗事だね。三人はどう思う?」
「敵を増やすより味方が増える方が嬉しいと思います。どうせ戦争が続くなら、誰かがやらなきゃいけないなら私はやりますよ」
「私はもともと工作艦ですから艦娘の治療等の観点から深海棲艦と艦娘の関係性を研究してみようと思います。少しでも顕現しやすい情報があれば戦争に優位になるでしょうから」
「如月は仲間を護りたい。その為に戦う必要があるならやります」
「そうか・・・・・ならばまず鎮守府内は艦娘限定で公表する。暁の言っていたデータの確認後、事実と分かったら世間に対し噂程度で深海棲艦は人間のせいで産まれたと流す」
　なんか元帥がこっち見てニヤニヤしてる。嫌な予感がするな。
「長期でやる作戦だ。暁!言い出しっぺなんだからこの任務受けてもらうぞ」
「はぁ?」
「艦娘達のなかには戦いたくないという娘もいるだろう。そんな娘達がどれくらいいるか分からないがもしうちの鎮守府で出た場合、その娘にはテレビに出てもらう」
「何言ってるんだ?」
「特撮だよ。深海棲艦と戦う艦娘を特撮ヒーロー、いやヒロインか、暁の言った話をデ

フォルメして特撮を作るんだ。それなら一般人にも分かり安いし、子供に人気が出れば深海棲艦の話も浸透しやすいだろう。噂は本当かもしれないとね」
「それが俺の任務と何の関係がある？」
「特撮のシナリオをお前が書くんだ！」
「断る。無理に決まってるだろう。俺にはそんな時間がない、那珂のプロデュースでいっぱいいっぱいなんだぞ。そもそも今の話程度の推測なんて少し考えれば分かるだろう、それが分からないなんてどれだけ頭わるいんだ？やりたきゃ自分でやれ」
　ふざけてる。これ以上仕事増やしてたまるか！断固たる決意を持って拒否だ。
「そうか、今はいいだろう」
「そろそろあいつらの入渠も終わる頃だから俺は行く。全員に話す前に言っても構わないんだろう？」
「構わないが、一応口止めはしておいてくれ」
「分かった」
「如月は待ってくれ、明石もだ。一応検査した方が良いだろう」
「元帥、先に言っておくがこれ以上俺の仕事増やしたら出てくから」
　そう言い残して俺は部屋をでた。

# 家出でＧＯ　！

「ここは？」

寝起きで頭が働かない。えーと、そうだ柱島だ。睦月と姉妹三人に話をしたあと、次の日にはホワイトアラートが発令されスクランブルも解除された。執務室での話で嫌な予感がしていたから部屋の荷物をまとめておいて正解だったな。まぁ、部屋移動でまとめた荷物を開けてなかっただけなんだが。今は如月だが、イ級と一緒に集めた資材（自分用）で俺と夕張と妖精さんで作った試作戦術強襲用コンテナに積んで元帥に言った警告通り横須賀鎮守府を出てきた。家出とか言うなよ。元の世界にあった特撮の話をベースに書けば出来るだろうがこれ以上仕事を増やしたくないんだ。柱島泊地は俺が建造された場所だ。泊地に近い場所だが、隠れ家を作ってあって良かった。自然に出来た洞窟だが、妖精さんと一緒に泊地から電気や水道等のライフラインも地中、海底を通してあり快適な生活をおくれる。電子レンジ、ＩＨコンロはもちろん水洗トイレやシャワーも完備の１ＬＤＫだ。隠れ家ってロマンだよな。横須賀の妖精さんと作った釣竿も持って来たからのんびり過ごそう。金もほとんどアルコールコレクションとタバコ代でしか使ってないからあるしな。今日はまず冷蔵庫と洗濯機、それと食料を買い

に行こう。タバコとアルコールは妖精さんに頼めば手に入る。もちろんお金は置いてくるから銀蠅じゃないぞ。場所は遠出してばれないようにしないとな。

「元帥！やっぱりいません。それとこれが暁さんの部屋にありました」

秘書艦の吹雪です。緊急事態が起きました。暁さんがいなくなってしまったのです。部屋はもぬけの殻で備え付けの机に辞表と書かれた封筒と姉妹艦の三人宛の封筒がぽつんとおいてありました。昨夜スクランブル解除後、横須賀鎮守府の艦娘を全員集めて執務室で話したものを伝えた時に、暁さんから警告されたにも関わらず元帥が調子にのって大好きな特撮の話をしてしまい暁さんは出て行ったみたいです。横須賀鎮守府の艦娘で戦いたくないという娘がいなかったのが救いかもしれません。

「まさか本当に出て行くとは」

「だから前々から言ったじゃないですか、暁さん一人でやってた仕事はこれから全部元帥一人でやってくださいね」

「・・・・・・分かった。その前に六駆の三人を呼んでくれ、この封筒を渡そう」

珍しく落ち込んでますね。自業自得なのでしょうがないですからフォローしてあげません。私にとっても暁さんは、いろいろやらかしてましたが大事な妹であり相棒なん

ですから戻るまでは許しません。多分いる場所はあそこだと思いますがしばらくは休暇を楽しんでください。

「これは事実なのかい？」

執務室に来た六駆の三人は元帥から謝られ渡された封筒に入っていた手紙を読んでわなわな震えています。

「私は佐世保でこの鎮守府は良い所だと聞いていたが、元帥！この手紙の中身は事実なのかい？もしそうなら私達はこの事実を公表して姉さんと同じく出て行くよ。私達は来たばかりだけど他の艦娘達もこれを知ったら人間の味方をしようなんて艦娘はいなくなるさ」

涙目の響ちゃんが大きな声で怒ってますね。雷ちゃんも電ちゃんも涙目に怒りを灯してます。

「暁お姉ちゃんが可哀想なのです」

「これは酷いわ」

「本当にすまない。これは僕の失態だ、暁ならこなしてくれると任せ過ぎた」

そりゃそうなりますよね。第二次妖精さんの乱や弥生ちゃん、卯月ちゃんのいた基地等、艦娘に対しブラックなことをやっていた基地を潰した暁さんが横須賀鎮守府で一番働いてましたからね。いくら給料に手当てが付くとはいえ一人で抱えすぎてましたよ。

手伝える事は手伝ってましたけどね。むしろ給料的に元帥よりもらってますしね。那珂ちゃんの曲の印税でもたくさんもらってるし、『艦隊新聞』に載った艦娘の長者ランキングでもトップですしね。

「私達の歓迎会に出れなかったのも仕事だった、すまないと私達に凄く謝ってくれたけど、これだけ働いてれば来れないに決まってるじゃないか。それなのにあんなに謝ってたのかい、私はなんてことを姉さんに言ってしまったんだ」

三人とも泣き出してしまいました。元帥のせいですがフォローはしておきましょう。

「三人とも落ち着いてください。暁さんは三人が危ないって分かったら艦隊編成中にも関わらず単艦で強制射出システムまで使って救出に向かいましたから、それに手紙を残したのも三人宛だけです。そんな暁さんが三人を嫌いになるなんてありえませんよ」

「本当に嫌いにならないかな」

「大丈夫です！暁さんは三人が大好きですから」

どうにか落ち着いてくれたみたいですね。これから艦娘全員集めて暁さんの穴をどうにか埋めないといけませんね。どうしましょうか・・・・・・

「大変です！」

執務室のドアを壊さんばかりの勢いで夕張さんが飛びこんで来ました。何かあったんでしょうか？

「装備保管庫の鍵が開いていたので中を確認したら無いんです」
　不味いですね。誰か無断出撃したんでしょうか？
「何がなくなった？」
「暁さんと一緒に趣味で作った試作機なんですが、あれは不味いんですよ」
　どうやら無断出撃ではないようですが何が不味いんでしょうか。もしかしてあれですか？あれがなくなったんですか。
「まさかあれですか？」
「そうです。吹雪さんはあれの試験に参加してたから分かると思いますが、暁さん以外の駆逐艦の娘が使ったら大惨事ですよ」
　あれを誰が持ち出したんだろう。頭が痛くなってきました。
「吹雪、あれってなんだ？」
「『ヤタガラス』です。試験には私も参加しましたが轟沈しかけました」
「なんだって！」
「本当に不味いんですよ。吹雪さんが試験に参加した後も改造を続けてましたから」
「今積んでる武装はなんですか？」
「武装は積んでませんが、イ級ちゃんで試験したブースターの改良型を取り付けてあります」

「その装備って暁姉さん個人の物なの？」
「そうです。だからこんなに焦ってるんじゃないですか、ちゃんと戸締まりしたはずなのに」
「なら姉さんが持っていったんだね」
「はい？」
「元帥のせいで暁姉さんが辞表を出して出て行ったんだ」
「暁さんがいなくなったんですか？」
「暁姉さんは仕事がありすぎて嫌になったみたいだ。仕事内容を少し聞いただけでも嫌になるくらいあるよ。むしろ暁姉さんが司令官だったと聞いたら納得出来る仕事ばかりだよ」
　響さんその通りです。実質横須賀鎮守府の司令官は暁さんです。元帥は大本営の仕事で手一杯ですしね。むしろ元一般人が良くやってると思いますよ。暁さんのブラック基地撲滅作戦『悪い子はいねぇが？なまはげが今から行くぞ作戦』で司令官を出来る人材が減ったから今の状況というのもありますし、若い司令官が増えてはきてますがもう少し時間がかかりそうですね。
「ということは、これから開発なんかは元帥を通さないといけないんですね」
　夕張さんが肩を落としてます。今までは個人的にいろいろ自由にやってましたから

そのせいでしょうか。

「これから全員集めて説明するよ。暁がこなしていた仕事を割り振り今後の対応を決める。吹雪、全員集めてくれ」

「分かりました。それでは食堂に全員集めます」

これで暁さんの負担が軽くなりますね。まぁ、元帥に反省してもらいましょう。

# まるゆフィッシュ！

「え～、暁が家出しました。なので暁がやっていた仕事の割り振りを行いたいと思います」

横須賀鎮守府打撃部隊旗艦の長門だ。家出？暁さんが？意味がわからないぞ。

「どういうことだ元帥？」

「私が理由は話します」

秘書艦の吹雪さんが元帥をマイクの前からどかして答えてくれた。

「まず前置きになりますが、この横須賀鎮守府は元帥が兼任で司令官をしています。私も大本営と鎮守府の両方の秘書艦をしています。本来であれば、大本営と鎮守府は分けるべきですが、皆さんがご存知の通り第二次妖精さんの乱以降、なかなか司令官を出来る人材を輩出できていません。その為この鎮守府は実質暁さん一人で回していました。それは元帥が建造を行わず、他の基地から艦娘を引き取るという考えに暁さんが賛同したからでもあります。これにより艦種も練度もバラバラなので、練度上げや連携等の出撃や遠征プランから鎮守府内の細々した生活に至る所の対処が必要になりますが、それを暁さんが対処してました。通常の基地で行う司令官業務よりも大変だったと思いま

す。そしてここからが本題である暁さんが出て行った話です。まず、那珂さんのプロデュース業。これは大本営管轄でしたが元帥命令で暁さんが行ってました。そして先日の元帥の話であった特撮のシナリオを暁さんにやらせるというもので暁さんは申し訳ないがこれ以上の仕事は出来ないと辞表を出して出て行ってしまいました。誤解してほしくないので言っておきますが、皆さんがこの鎮守府に来たことは確かに暁さんの仕事が増える原因の一つと言えますが、私も暁さんも負担だとは思ってません。なぜなら暁さんは皆さんのことを家族だと言っていましたから、艦娘が家族なんておかしな話かも知れませんが家族の為の仕事だから大丈夫だとそう言って笑ってました。だから今まで頑張ってくれた暁さんに今回は長い休暇を楽しんでもらいましょう。そして暁さんが戻って来るまで全員で鎮守府を、家を守りましょう」

暁さん・・・・・家族か!これは胸が熱いな。元大本営第一艦隊旗艦ではあったが暁さんに会って上には上がいると知ってこの鎮守府に移動希望を出したが正解だった。こんな気持ちになれるなんて思わなかったぞ。周りを見ても皆の雰囲気が変わったのが分かる。

「吹雪さん、我々に何でも命じてくれ。暁さんが戻るまでこの長門どんなことでもしよう!」

「ありがとうございます。これから各艦種の代表、各部署のメンバーに残ってもらい割

り振りを行いたいと思います。軽巡や駆逐艦はこれから負担が増えると思いますがよろしくお願いします。それでは解散」
暁さんが行っていた仕事か、これで恩が返せるな！どんな仕事でもこなしてやる。ビック７の力、侮るなよ！

ようやく落ち着いた生活を始めた暁だ。今はのんびり釣りをしてる。晩酌用の肴を何匹か釣り上げた所なんだがな。
「おい、まるゆ！魚が逃げて釣りにならん」
「いつから気づいてたんですか？」
釣り針を水着に引っ掛けられたまるゆがぽちゃんと海から出てきた。まるゆ！捕ったどー！
「上から丸見えだ。気づいてなかったのか？」
「はい、全然気づきませんでした」
驚くだろう？これでもまるゆは海軍憲兵隠密部隊隊長なんだぜ。
「まったく。茶ぐらい出すから上がってこい」
「はい」

多分吹雪だよな。まるゆ一人を寄越したってことは戻って欲しいんだろう。まぁ戻らないけどね。姉妹のことは気になるがよほどデカイ戦いにならない限り心配ないだろう。それにまるゆが来てるってことは憲兵案件も落ち着いてるってことだから、心配すべきは先日の襲撃だな。わざわざ連合艦隊組んで来たんだ、威力偵察だろう。対潜装備がなかったのが痛いな。ソナーがあれば潜水艦の有無も確認出来たのに。準備だけでもしておくかねぇ。

「あ、あの暁さん。この部屋、大本営の執務室より立派なんですけど」

「家具職人妖精さん達に好きに作って良いって言ったらこうなった。それでここに来た理由は？」

「まず、ここのことは吹雪さん、あきつ丸さんと私しか知りません。吹雪さんにあきつ丸さんと二人だけ呼ばれてこの場所の事を教えてもらいました。元帥からは憲兵隊で捜索に当たるように言われましたが動いてるのは私一人です。ここに来た理由は吹雪さんから伝言です。とりあえず暁さんの仕事だった鎮守府関係は割り振りして行っています。それにより暁さんは各セクションの相談役になりました。あと那珂ちゃんのプロデュース関係は人間のマネージャーさんを付けて回しているので、曲関係だけお願いします。それと暁さんの現状は有給休暇で処理してます。一応２ヶ月ちょいありますが２ヶ月を目処にしてください。とのことです」

なんだかなぁ。知らないうちに昇格してるぞ。そんなつもりはないんだけど、静かに暮らしたいし。まぁ仲間や家族と決めた奴らは守るつもりだ。そう誓ったしな。
「戻るつもりはないんだがなぁ」
「そうなんですか?暁さんの姉妹の六駆の三人が落ち込んでましたよ。何も知らないで酷いこと言ってしまったって、それにそこにおいてある通信システムはたしか海軍の通信傍受用のものですよね。気にかけてるなら戻ってあげて下さい」
ぽわんとしてるようでちゃんと見てるんだな。それに今回のことはあいつらのせいじゃないしな。悪いのはすぐに調子にのる元帥だ。
「気にかかってることがある、吹雪に伝言頼めるか?」
「なんでしょうか?」
「先日の襲撃は知ってるな?」
「もちろんです」
「空母がいなかったんだ。戦艦を含む連合艦隊を組んでるにもかかわらずだ。生憎対潜装備を持ってるやつがいなかったから推測しか出来ないが、威力偵察だと思ってる。実際に戦闘をしたのは遭遇した遠征部隊と明石・夕張・俺だ。それと帰りに一航戦の二人に索敵と護衛で艦載機を出してもらった。救出部隊の速力なんかも見られた可能性がある」

「それって不味くないですか？」
「あくまで推測だが、救出部隊はまんま打撃部隊の面子だから装備関係の見直しと編成の変更まで考えておいて欲しい。それと、次の作戦が漏れてる可能性があるから気をつけろと伝えて欲しい」
「スパイがいるってことですか？」
「違う。敵は解放した近海まで来たんだ、あれが威力偵察ならもっと踏み込んできていた可能性がある」
「作戦内容が漏れていたからこその威力偵察ってことですね」
「そう考えておいて損はないだろう、それと持って返って欲しいものがいくつかある。まず妹達にこれを頼む。それとこれを夕張に渡してくれ」
「手紙と設計図？」
「カレー大会用のレシピだ、三人に渡してくれ。設計図は元帥にばれないように渡してくれ。外においてあるやつの改修案だ。元帥には見つけたけどこれおいて逃げられたとでも言っておけ」
「あれも持って返らなきゃいけないんですか・・・・・・」
　あ、まるゆがちょっとへこんでる。コンテナみたいなもんだしな。改修後はもっとかっこ良くなる予定だ。カレーのレシピは俺が元の世界でバイトしてたカレー屋のも

のだ。今までのも人気のものだったが渡したレシピは一番売れてたもののレシピだ。料理が素人でも簡単に作れてなおかつ美味しい。辛さも調節ができ、トッピングも大抵のものは合う。スパイスの調合が面倒だがそれも比率でいける。カレー大会はなんとかなるだろう。三人も楽しんでくれるといいんだが。夕張に渡す改修案は機械設計の仕事をしていたからこそだな。それにしても設計図無しでも話だけで形にする妖精さんはなんなんだろうか？いまだにあの謎パワーが理解出来ない。何で燃料と鋼材、弾薬、ボーキサイトで艦娘が出来るんだ？うん、気にするだけ無駄だな。

「頼む。それと見つけた場所は東北だとでも言っておけばいい」

「反対方向ですね」

「あぁ、今はそれでいい」

「あっ、忘れてた。元帥からの手紙です」

正直いらない。今さら謝られてもむかつくだけだ。

「持って帰ってくれ」

「ふぇぇ、そんなこと言わないでくださいよ～、元帥も反省してましたから」

しょうがない。まるゆに免じて読むだけ読んでやる。

『てへぺろ（・ω＜）』

「殺す！」

ぐしゃぐしゃに丸めてゴミ箱にダンクしてやった。今度会ったら絶対殴る。右ストレートでぶっ飛ばす。真っ直ぐ行ってぶっ飛ばす!よし一度殴りに戻ろうか!

「なぁ吹雪。ここに置いといた封筒知らない?」
「覚えてないんですか元帥?暁さんに会ったら渡してくれってまるゆちゃんに渡してたじゃないですか」
「あっ!こっちを渡そうと思ってたのに間違えた」
「えっ!・・・・・・元帥、内容は?」
「今の暁に見せたら俺が大惨事になるな」
「元帥、骨は拾って上げますからね」
「決定事項なの!」

# 日替わり秘書艦鳳翔

「以上が報告になります」
「ありがとう、まるゆちゃん」
「いえ、任務ですし、久しぶりに暁さんの手料理をご馳走になりましたから」
　日替わりで秘書艦を経験がある艦娘ですることになり今日は私、鳳翔がやっていますがなんだか聞いてはいけない話を聞いてしまいました。どうしましょうか？
「吹雪さん、今の話は・・・・・・・」
「今回の件は全て元帥が悪いので気にしなくても良いのですが、暁さんの居場所を知っているという件は内密にお願いします。それと今お聞きの通り装備や編成の変更をしておきたいので各艦種の代表を１６００に第一会議室に集めてください。それと今度のカレー大会出場者に六駆の三人も入れて、もし手が必要なら料理が出来る娘を補助にいれて、このレシピを渡しておいてください」
「分かりました。居場所のことは言わずに渡します。ただ任務の後でお疲れでしょうがまるゆさんと一緒に伝えたいんですが」
「ふぇぇ、どうしてですか？」

「ご存じの通り三人共落ち込んでますので直接お会いしたまるゆさんから暁さんの様子を伝えて欲しいんです。そうすれば少しは元気になると思うんです」
「そうですね、まるゆさんお願いできますか？」
「分かりました。このレシピのカレーをご馳走になりましたからそれも伝えればイメージしやすいかも知れませんしね」
「ありがとうございます、まるゆさん。それでは早速行きましょうか」

「という訳です。三人には観戦ではなく参加者として楽しんで欲しいと」
「分かった、やってみよう！雷も電も良いだろう？」
「分かったわ」
「やってみるのです」
　良かった三人共嬉しそうにしてます。それにしてもあのレシピは凄いですね。普通のレシピ本では適量など簡略化されたりしている部分も小さじ1入れたら味見と細かい所まで書いてあります。これなら素人が作っても大丈夫でしょう。味見は大切です。とある二人の艦娘がそれをせずに鎮守府を機能停止に追い込んだ『ダークマターは普通の見た目と香り事件』は皆一口しか食べていないにも関わらず倒れました。そう言えばあの時も暁さんが妖精さんを指揮し奮闘してましたね。ブラック基地撲滅の為に出張

していた暁さんと研修の為に鎮守府にいなかった間宮さんの二人が頑張っていなかったら轟沈者も出ていたかもしれません。あの痺れと口の中に広がる形容しがたい生臭さは忘れられません。

「吹雪さんから一人調理補助を入れてかまわないと言われていますがどうしますか？」

「暁姉さんのレシピですもの私達だけでやりたいから補助よりも練習を見てくれる人がいいわ。私も電も正直料理ってやったことないし」

雷ちゃんと電ちゃんはやったことないのね。伊良湖さん辺りなら大丈夫でしょう。間宮さんにも食堂の使用許可を得ておかないといけませんね。使用する食材も買っておかないといけません、スパイス関係はどうしましょうか？あら、まるゆさん運貨筒ってそうやって開けるんですね。たくさん出てきましたがそれは何でしょうか？

「暁さんからカレー大会に参加するなら渡してくださいと頼まれたものです。それぞれ袋に名前が書いてあります。使い方はレシピにあるそうです」

「分かった、ありがとうまるゆ。なんとかなりそうだよ。先日の件で吹雪が気をつかってくれたのかしばらくは座学と訓練だけだからこれでカレーの練習が出来るよ」

スパイスでしたか、さすが暁さんですね。これだけの量があれば本番まで毎日使っても足りるでしょう。それにしてもあのスパイスの量、明らかにまるゆさんの運貨筒の容量をオーバーしている気がするのですが・・・・・

「まるゆさん、その運貨筒にはどのくらい入るのですか？」
「やったことがないから分かりません。でも結構入りますよ。重さも変わりませんし重宝してます。それで良く夕張さんの買い物に付き合わされます」
　苦笑いをしていますが夕張さんは何をしてるのでしょうか。私も今度お店の仕入れを手伝いしてもらいたいものです。
「ちょ～と待つネ！」
「「金剛さん！」」
「ビッキー、ライデンもカリー大会に出るのデスカ？」
「「名前をまとめないで！」なのです！」
「私達も出るよ。暁姉さんの代わりにね」
「今回は私にとっても元帥のストマックを掴むチャンスデース。優勝は私がもらいマース」
「そう簡単には優勝は渡さないわ」
「誰デース!?」
「「足柄さん！」」
「暁さんがいない今この鎮守府のお料理ナンバー1の称号を私が戴くわ。私が研究を重ねたワイルドでハードな極辛カレーでね」

「面白いね足柄、英国でさすが飢えた狼と言われただけはありマース」
「私達も忘れてほしくないのです。辛いだけがカレーじゃないのです」
　電さんもやる気ですね。先ほどのまるゆさんの話ではあのレシピのカレーはそこまで辛くないみたいですし楽しみになってきました。それに足柄さんは駆逐艦の座学や訓練を見ているから三人を気にしていたのでしょうね。
「なら心しておきなさい」
「そうデース。暁さんの影で昨年まで涙を飲んだ艦娘達が今年こそはと参加しマース！暁さんの妹達にまで負ける訳にはいかないのデース！」
「せいぜい首を洗って待っていることね」
「では、決戦の日を楽しみにしてマース」
　ふふ、なんだかんだ言っても皆さん気にかけていたのですね。なんだかんだ暁さんにお世話になった艦娘も多いですからしょうがないのかもしれませんね。いつの間にか先ほどのやり取りを見ている艦娘達が増えています。

「なんか燃えてきたわ！もうぜぇ～ったい負けないんだから」
「私も頑張るのです」
「やるからには勝つ！絶対優勝して暁姉さんのカレーを認めさせてやるんだ！」

「「「おー！」」」

三人共頑張ってください。応援してますね。

# 元帥、胃痛との戦い

「それでは、第二十九回海軍定例報告会を始めます。まず、お手元の資料の二ページ目を開いてください」

定例会議に参加している元帥です。毎回思うんですが海軍の会議に何で総理大臣まで参加してるんでしょうか？しかも司会で！胃が痛い。

「まずは先日のイエローアラートの件です。元帥から報告をお願いします」

「現状、全国の鎮守府に対潜装備の水雷戦隊で哨戒をしてもらっていると思うが今回その理由を伝える。先日、イエローアラートを発令した理由もそれに関わってくるので君たちの意見が聞きたい。まずは先日のイエローアラートの件だが、横須賀鎮守府で近海哨戒中に戦艦ル級を含む連合艦隊に襲撃された。しかし、この連合艦隊に空母は一隻もいなかった。意味が判るかい？」

一同を見渡す。真剣な表情の中に困惑の色が見て取れる。

「横須賀鎮守府としての見解は威力偵察。近海まで連合艦隊で来たということは途中補給等してるはずだし、潜水艦による偵察の為の囮だったんだろう。イエローアラートはこの連合艦隊を囮にした他の部隊による攻撃を警戒して発令した。それと最後に付け

加えるなら、次回予定している作戦が漏れてる可能性がある」
「どういうことですか元帥！スパイがいるとでも？」
「違う、深海悽艦達が近海まで威力偵察をするなら隠密せいに優れた潜水艦ならもっと近くまで来ている可能性がある。そう仮定した場合、こちらの戦力を把握しておきたい思惑があちらにはあるはずだ。理由の一つとしてこちらの作戦が漏れてると考えておくべきだろう。次回の作戦を逆手にとってくることも考慮した準備をしておくべきではないかな？」
　先ほど発言した大湊の司令官も含め考えこむように目を閉じるものが多い。
「それは『魔王』も同じ見解ですか？」
「そうだ」
　佐世保鎮守府の提督が目を開き挑発するように言ってきた。この人顔が怖いから威圧感あるんだよな。その怖い顔で挑発とか止めてよね。胃が痛くなるからさ。理由は分かるけどさ、武蔵を前の大本営に鳴り物入りで譲ったと思ったら駆逐艦ならぬ鬼畜艦にメンタルクラッシュされて出戻りしたら恨みもあるだろう。しかも、順調だった出世は前の大本営がなくなったことで潰えて元一般人の僕が元帥だもんね。元帥職についた理由が全国の妖精さんの投票結果だから文句は妖精さん達に言ってください。それにしても『魔王』か・・・・・、二つ名制度は今の体制になってから練度が九十九に

なった艦娘に送る称号だ。この定例会の最後に命名式を行うけど最初は大変だったなぁ。なんせいきなり例外の練度測定不能のうちの暁が最初だし、なんだよ『魔王』って納得しちゃって暁に伝えたら殴られたし、吹雪にいたっては『鬼嫁』に決まった時はしばらく口聞いてくれなかったんだよな。普通の二つ名持ちは手当てがついて給料アップするから艦娘は嬉しいだろうけど、変なの付いたら司令官同士で殴り合いになったりするからなぁ。『天使』って付いた時は壮絶だった、それはうちの電だ、いやうちの五月雨だｅｔｃ．　と司令官が複数入院したからな、結局最後に立っていた大湊の司令官が文月に付けたっけ、救急車に乗る前のセリフが「世に文月のあらんことを」ってもう無事だった司令官達は言葉もなかったよ。

「ならば作戦が漏れてる前提で次回の作戦を行うつもりですか?」

　いけない、余計なことを考えてる場合じゃない。

「そうだ、予定した日に開始する。最初は遅らせることを考えたが、相手に時間を与えることになるし、早めるのはこちらの準備が間に合わないことになるからね。ただし、これからはあまり時間がない。だからこれからは各基地は開発や演習を中心に行ってもらいたい。受け持つ海域も前に伝えた通りのままだから編成や装備の準備もしていって欲しい。他に決めておきたいことはあるかい?」

「特にはないみたいですね。では次は資料の八ページです、各基地、泊地、鎮守府の報告

に移りたいと思います」
　やっと出番が終わったけど、会議の後が大変なんだよなぁ、官邸に行かなきゃ行けないし、総理も聞いてるんだから書面で十分じゃないのかな？横須賀の報告はほとんどないから良いけど周りを見るとニヤニヤしだしてるなぁ。緊張した空気が弛緩しだしたな。さぁ、胃痛が止まらない時間の始まりだ。
「それでは皆さん！お待ちかねの命名式の時間がやって参りました。頑張った艦娘達に良い名を付けて上げてくださいね！」
　いきなりノリノリだな総理！最初は呉の摩耶か、希望は『飛将』。三國志の呂布でも目指してるのかな？まぁ、いいんだけど。
「『対空番長』はどうかな？」
「それなら希望の『飛将』で良くないか？」
『対空番長』って艦載機の撃墜スコア見たらそうだけど、もっとちゃんと考えてあげようよ。
「それじゃあ、呉の摩耶は『飛将』に決定で！」
　あっ、呉の提督が安堵のため息をついてる。希望通りで良かったね。次はうちの不知火か・・・・・、希望が通ると良いんだけど・・・・・・うわぁ、みんなゲスい顔。不知火に落ち度はないんだけど釘は差しておくか。

「次は横須賀鎮守府の不知火です。希望は『虎王』！ってどうしました元帥？」
「一応、希望名の由来の説明をしておこうと思ってね、『虎王』は暁が付けたんだ。だからなるべく希望通りでお願いね」
　舞鶴の提督が静かに立ち上がったけどなんだろう？
「それよりも元帥！うちから不知火が移動したのは三ヶ月前のはずだ、艦娘の練度がこんなに早く上がるなんて聞いたことがない、どういうことですか？」
「それはね、暁の弟子になったからだよ」
　みんなの顔色が変わったね。そりゃそうだ、戦艦すら手抜きで倒す鬼畜艦の弟子ということは厄介ごとが増える可能性があるってことだからねぇ。
「どのような訓練をしていたのですが？」
「聞いた話だから詳しくないけど1日で三十六時間分の修業したって言ってたよ」
「そんな・・・・・・あんなに可愛かった不知火が、なんてゲスな所業を許可したんだあんたは！」
　舞鶴の提督が崩れ落ちてる。周りも御愁傷様といった顔をしてる。ちょっと待って、僕は不知火から希望されたから暁に話ただけなんだけど！
「よりにもよって『魔王』の弟子になるなんて！」
　ほんとごめんね。でも周りは頷きすぎなんじゃないかな？陽炎と黒潮を守りたいっ

て不知火の気持ちは本物だからここまで頑張ったんだよ。
「それでは皆さん、横須賀の不知火は『虎王』で決定です。次は宿毛の羽黒ですね。希望は・・・・・本当にこれが希望なんですか？」
うん？総理の様子が変だ。どれどれ、宿毛の羽黒のページは、あった。これは・・・・・
「失礼しました。希望は『俺の嫁』」
お通夜みたいな雰囲気が一気に変わった。あぁ、吹雪。今日も帰るのが遅くなりそうだよ。それにしても胃が痛くなってきた。司令官がこんなのばっかりで良いのかなぁ？

# 激闘、カレー大会開幕！

「とうとうこの日が来たか・・・・・・」

カレー大会当日に知らなかったではすまない事態に直面している元帥です。本当に困りました。

「元帥、覚悟を決めて下さい」

「あぁ・・・・・・」

「吹雪よ、何故気づけなかったんだい？」

「仕事がありすぎて、気づけませんでした」

「しょうがない、明日からの予定をすべてキャンセルしてもらおう」

「そのようにしておきます」

ため息しか出ません。今まで暁に頼りっぱなしのつけが回ってきたみたいです。審査員は戦艦代表長門、正規空母代表赤城、軽空母代表鳳翔、重巡代表古鷹、軽巡代表天龍、駆逐代表吹雪、潜水艦代表伊５８、補給艦代表間宮そして僕の九名で行いますが、一週間は鎮守府が活動停止することになるだろう。

「さぁ、元帥行きますよ」

パーン！パーン！パーン！

カレー大会の始まりの花火が打ち上げられた。これから開会式が始まり、調理、審査と進んで行く。第六駆逐隊の響だよ、私は大丈夫、落ち着いている。不安よりもワクワクが止まらない。二人の妹も頼もしい顔をしている。暁姉さんのレシピで勝つんだ！

「響！震えてるけど大丈夫？」

「これは武者震いってやつだよ。大丈夫さ、だってさっきからワクワクしてるんだ」

「今日の為にたくさん特訓したのです」

「そうよね、勝つのは私達よ」

ふふ、二人共緊張してないみたいだ。これならいける！

「マイク音量大丈夫？チェック、ワン、ツー。さぁ！横須賀鎮守府カレー大会が始まります。司会実況は私金剛型四番艦霧島！現場実況は」

「は～い！みんなのアイドル那珂ちゃんで～す。それじゃあ出場者を紹介しちゃうよ！最初は、バーニングカレー！金剛さんと榛名さん」

「元帥のストマックを掴むのは私達デース」

「あれ、榛名さん青い顔して大丈夫？」

「・・・・・・はい、は、榛名はだい、じょうぶ・・・・・・・」

グラッと榛名さんが倒れた。
「ノォォーウ！榛名ぁぁー大丈夫デスカ」
担架に乗せられた榛名さんが運ばれて行く。始まる前から何があったんだろう？これで金剛さんは一人で戦うことになる同情はするけど手加減はしない。
「き、気を取り直して出場者の紹介を続けていくよ～五航戦の力を見せつける為に来ました。翔鶴さん、瑞鶴さんです」
「一航戦の先輩達に少しでも近づけるようなカレーを作ります」
「瑞鶴にはカレーの女神様がついてるんだから！」
「カレーの女神って？まぁ、次は一航戦は赤城・加賀だけじゃない！大鳳さんと龍驤さんです」
「大鳳カレーを作ります！」
「一生懸命作ったる！いっちょやったるで～」
那珂ちゃん、私も気になるよ。瑞鶴さんのカレーの女神ってなんだろう？それに、龍驤さんとは艦の時に一緒の作戦に参加したこともあるけどこの姿になってからはあまり関わってないから料理については分からない。大鳳さんは大鳳カレーって言ってるからオリジナルカレーが作れるんだね。どんなカレーなんだろう？
「次は！誰が予想した！鎮守府を恐怖のドン底に陥れた二人組。比叡さんと磯風さんで

す」
「今の磯風の力、嘗めないでもらおう！」
「気合い、入れて、作ります」
　審査員が皆青い顔をしてる。恐怖のドン底って比叡さんと磯風は何をやったんだろう？
「次は～！全国版艦隊新聞調べ、お嫁さんにしたいランキング堂々一位の羽黒さんとお嫁に行かせてあげたいランキング一位の足柄さんで～す」
「那～珂！ちょっとこっ」
「私が抑えているうちに早く逃げて下さい。那珂ちゃん！」
「ひゃ～」
　そんなランキングがあるなんて知らなかった！羽黒さんは優しいし、綺麗だから人気があるんだね。それにしても足柄さん・・・・・艦時代はすごく格好よかったって雷と電が言っていたのに艦娘になってから何があったんだろう？
「えぇ～と、現場実況の那珂ちゃんが戻るまで私霧島が紹介を続けます。この三人の説明はいらないでしょう！この国の艦娘ランキングトップであり、横須賀鎮守府カレー大会三年連続優勝の姉を持つ響さん、雷さん、電さんです。こちらで入手した情報によりますと三人は暁さんが今回の大会に向け作り上げたスペシャルなカレーのレシピを更

に進化させたそうです」

ふっ、暁姉さんのレシピを自分達の好みの味にしただけさ。作って分かったけどスパイスの配合を少しいじるだけでこんなにも変わるなんて思わなかった。いじる手順やいじった結果まで書いてあったし、やっぱり暁姉さんは凄い。

「あら、どうやら相当な鍛練を積んできたみたいね」

那珂ちゃんを追いかけるのを止めたのかいつの間にか足柄さんが電の絆創膏だらけの手をとってる。それは違うとだけ言っておこう。玉ねぎをすりおろす時に自分の手まですりおろすとは思わないよね。

「約束通り相手をしてあげる」

「イエース！正々堂々勝負ネ！」

「そして審査員は、元帥と愉快な仲間達！」

那珂ちゃん・・・・・・屋根の上ってそんなところから実況するなんて、さすがプロは違う。

「「誰が愉快な仲間だ」でち」

反応したのは天龍さんとゴーヤさんだけなんだけど、みんなの微妙な顔してるね。

「元帥より開会の宣言をお願いします」

「今後大規模作戦が発令されるが今日だけは皆楽しんでカレー大会を盛り上げて行こう

！」

「ありがとうございます。それでは鎮守府お料理Ｎｏ．１の名誉をかけて！」

「鎮守府カレー大会スタート！」

パーン！

# 激闘、カレー?・大会!

大きめのボールに水を入れ軽量した米をザルに入れて一回目は軽く混ぜて水から上げる。二回目からは水を取り替えながら八回位づつ混ぜて米についていた肌ぬかをすすぎ落として、終わったら釜に入れて更に水を入れて一時間位浸水させる。っと暁お姉ちゃんのレシピ通りお米の準備が終わったのです。

「電、お米が終わったらこっち手伝ってくれる?」

スパイスをすり鉢でごりごりしてる雷ちゃんから救援要請なのです。電が怪我をしたせいで雷ちゃんと響ちゃんに負担をかけてしまいました。玉ねぎが目に染みて勢いでがりっと自分の手までおろしてしまったのです。準備していた物は台無しだし、後始末も大変だったのです。だから気合いを入れてやれることはやるのです。

「あんなに練習したから大丈夫なのです!」

「急にどうしたの電、手が痛いの?やっぱりバケツ使えばよかったのに・・・・・・」

「ち、違うのです。気合いを入れただけなのです」

「大丈夫よ。私達のチームワークなら負けないわ、私にもっと頼っていいのよ!」

「そうだよ電、みんなで勝つんだろう?」

野菜とお肉の下準備を終えた響ちゃんもスパイスの準備の為に私達の方に来ました。
「電は、それぞれスパイスの計量をしていってくれないか、雷はトマトの缶詰めを開けてくれ」
「了解なのです」
「は〜い、任せて!」
電が軽量したスパイスを響ちゃんがボールに入れて混ぜます。入れる順番もあるのでたくさんのボールが並んでいきます。
「金剛さんの所は榛名さんが担架で運ばれてたけど、他のチームはどんな様子だろう」
「ちょっと見てみるのです」
大鳳さん龍驤さんチームは特別変わった材料は用意してないみたい。でもあのちょっと黄色いのは何なのです?
「なぁ、大鳳。それって入れすぎちゃうんかい?」
「これぐらい普通じゃないんですか?」
「いや、入れすぎやろ。よく見てみぃや、他の野菜と肉の三倍は用意しとるやんけ」
「でも、私は好きなんですよ。これは男爵でしょ、こっちはメークイン。それと珍しいキタアカリ」
「種類を聞いとるんちゃうわ!」

「食物繊維は身体に良いんですよ？」
「こんなに食べたら君、ガスが溜まりやすくなるで」
「ガス！あぁ、ば、爆発!?燃料庫は大丈夫!?引火に気をつけないと！」
「ちゃうねん！」
　なんか漫才が始まってるのです。それでも問題なく進んでるみたいなので油断は禁物なのです。
　次は瑞鶴さん翔鶴さんチームなのです。
「漫才なんかしちゃって、大鳳ったら」
「大鳳さんもこの鎮守府に馴染んできたってことだから良いことじゃない」
「そうねぇ、あの子は翔鶴型の妹みたいなものだしここは喜ぶところなのかしら？あれっ！翔鶴姉ぇ、カレーがはねてる」
「えっ、どこ？カレーの汚れって落ちにくいのに」
「ほら、ここ、ここ！」
「待って、スカートはあまり触らないで！ふぁあぁ！」
　翔鶴さんが転んでしまったのです。
「は！」
「痛たたたっ」

あれ?瑞鶴さんが持ってるのってまさか!やっぱり履いてない。翔鶴さんのスカートが抜けてしまったのです。どうやって抜けたんです?

「ハラショー!」

響ちゃんダメなのです。

「もう、なんで私ばっかり!」

「しょ、翔鶴姉ぇわざとじゃないの〜」

「ありがとうございます。こういうの待ってました!」

「き、霧島さん?テンションおかしくない!?」

「ピンクの紐パンだと・・・・・・・」

「・・・・・・元帥?」

「いや、何でもない」

「皆さん、今のは?」

「「「「「ギルティ」」」」」

「それではお仕置きｄｅａｔｈ!」

「吹雪、ちょっと待って語尾がおかしいから!」

なんかあっちもこっちも大騒ぎなのです。

「ちなみにカレーの染み抜きは、台所用の中性洗剤で染み抜き棒を使うと良いらしいで

すよ」
「霧島さん、その生活の知恵はどこ情報?」
「暁さんですね。前に卯月ちゃんが制服にカレーの染みを作ってしまい暁さんが染み抜きしてました」
そんなことまで暁お姉ちゃんはやってたのです?というかそういう所帯じみた知恵はどこから仕入れてくるのでしょう。
「トマトの缶詰め全部開け終わったわ!」
雷ちゃんが缶詰めを乗せた台車を押して戻ってきたのです。響ちゃんはすでにスタータースパイスを入れて玉ねぎ、お肉等を炒め終わっているので寸胴鍋にトマトの缶詰めとスパイスとお水などを入れて煮ていきます。トロっとしてきたら野菜を入れて更に煮て具材に火を通していくのです。
「後は仕上げまで煮るだけだね。残りのチームはどんな様子だい?」
「翔鶴さん瑞鶴さんのチームは棄権したのです」
「金剛さんは比叡さんと話をしているわ」
「ちょっと待って!あれはなんだい?」
響ちゃんが指を差したのは確か比叡さんと磯風ちゃんのチームの方だったはず、あれはなんでしょうか!凄いのです。寸胴鍋から立ち上る湯気が七色に輝いているのです

!

「凄いネ、比叡と磯風はどんなカレーを作ったらあんなに輝く湯気が出るのデース?」

「お姉様も味見しますか?」

「なら三人で味見をしようじゃないか!二人ともこの磯風に続け!」

あれはカレーの色なのでしょうか?紫色なのです!

「「せ〜の!」」

どうしたのでしょう。三人が小皿を持ったまま固まって動かないのです。あっ!白目を剥いて泡を吹いて倒れてしまいました。

「カウント、ワン、ツー、スリー!お姉様方と磯風ちゃん三人ともノックダウンです。それと開幕で倒れた榛名は昨晩比叡お姉様に付き合って味見をしていたのでその影響で倒れたんだと思われます」

「霧島さん、顔も声も冷静だけど実はテンションＭＡＸだよね!?」

三人が担架で運ばれて行くのです。それに宇宙服みたいな防護服を身に纏ったカレー大会実行委員会の艦娘が比叡さんと磯風ちゃんの作った七色に輝く湯気の出ている寸胴鍋を大きな箱に入れて運んでいきます。科学兵器みたいな処理の仕方なのです。どうやって処理するんでしょうか?それにこころなしか審査員の人達の顔が嬉しそうなのです!

「周りが勝手に脱落していくこの虚しさはなんなのかしら？」
　雷ちゃんが呟いてます。でもまだ一航戦チームと足柄さんと羽黒さんのチームが残っているので油断は禁物なのです！
「二人ともそろそろ味見をしてみよう」
　いけない、響ちゃんに任せっきりだったのです。気合いを入れたのにこれではいけないのです。
「美味しいのです」
「いい、今までで一番かも！」
「本当だ！昨日のスパイスの変更が良い方に向かったみたいだね」
「でもまだ油断は出来ないのです」
「そうね、残りの仕上げを気合いを入れていくわよ」
「「おー！」」
「かっらー！なんやこれ、辛すぎるやんけ！」
「痺れるほどの辛さなのにどこかまろやかでこれは後を引く味だわ！」
　これは龍驤さんと大鳳さんの声なのです！
「これまでの知識と経験。そして数えきれないほどの試行錯誤を繰り返して生み出された黄金配合スパイス！私と貴女達とは年季が誓うのよ！」

「なんやと?」
「それに何よりも背負ってるものの重さが違う!」
「どういう・・・・・・」
「次の機会こそ確実に決めるための女子力!お料理Ｎｏ．１という名誉が私には必要なのよ。貴女達みたいなお子様体型には分からないかもしれないけど、もうね・・・後がないの・・・」
　ゴーン・・・・・・低い鐘の音?幻聴が聞こえるくらい周りの空気が死んでしまったのです。
「あぁ・・・・・一気に会場の空気がお通夜に!基本みんなお祭り気分なのにこの人ガチ中のガチ!大ガチだよ!」
　あぁ、龍驤さんと大鳳さんが膝と手をついて項垂れてしまったのです。
「体型まで侮辱して、容赦なく心を折りにいきましたね。流石は飢えた狼!」
「許してください。私はもうやけ酒に沈む姉さんを見たくないんです」
「そして羽黒さんはガチ泣き!」
「立ってください龍驤さん!」
「この声は、朝潮ちゃん!」
「大丈夫です!これからは朝潮型駆逐艦として生きて行けば良いんです!」

ゴーン・・・・・・あっ!また空気が死んだのです。こういうのなんて言うんでしたっけ?そうです、てんどんなのです。
「グハっ!」
「龍驤さんが吐血した!」
「フォローかと思いきや止めを差しに行くなんて朝潮ちゃん、なんて恐ろしい娘!」
「制服のサスペンダーつながりでしょうか?」
「「電も気をつけるんだよ」のよ」
響ちゃん、雷ちゃんも酷いのです。電はこんなことしないのです!
「あぁっと、龍驤さん大鳳さんチームここで棄権です。これで残っているチームは第六駆逐隊の三人だけです」
止めを差された龍驤さんが担架で運ばれて行ったのです。そもそもなんでカレー大会なのにこんなに担架で運ばれて行くんでしょう?
「オーっホッホッホ!残りの小娘達で私の人生の重みに耐えられて?オーっホッホッホ!」
「姉さん・・・・・・・」
もの凄いプレッシャーが足柄さんから放たれて来るのです。ぐっ!足が・・・・・・響ちゃんも雷ちゃんも膝をついてるのです。そんなぁ・・・・・ここで終わりなんて・・・・・

「負けるな、第六駆逐隊!」
「三人共頑張って!」
「お前達は十分な努力をしたはずだ!そんな情けない姿をさらす為にこの大会に出たのか?違うだろう、偉大な姉に近づく為に参加したはずだ。なら最後まで取り組むのみだ!」
「「長門さん、なんで・・・・・・」」
「むろん、そう考えるのは私だけではないさ!」
「そうだ、立ち上がれ!」
「立て!立ち上がるんだっぽーい!」
「んなぁ～んと、会場中から第六駆逐隊コール!彼女達の頑張りがついに会場を動かしたというのでしょうか?」
「ただ単に足柄さんの作り出したこの暗い空気をどうにかして欲しいだけなんじゃ・・・・・・・」
「・・・・・・少し軽くなった!」
「!?」
「皆が呼んでくれるなら!」
「私達は立ち上がるのです!」

「そうだよ、私達はこの暁姉さんのレシピに誓ったんだ！皆で勝つって！」
「頑張れー！ファイトォ！」
「行くよ、二人とも！」
「「オー！！」」
「死に損ないの小娘どもが！どこからでもかかってくるがよいわ！」
「第六駆逐隊立つ！今、横須賀鎮守府の未来をかけた運命の最終決戦が始まるのです！」
「ちょっと待って！これカレー大会だよね！ねぇっ！」

パーン！

「これで全てのカレーが出揃いました！いよいよ最終審査の時です！」
「全てと言いつつ二つしかないのを皆が気にする前に審査しちゃって！」
「それでは足柄さん・羽黒さんチームのカレーから、実食！」
審査員さん達が一口、足柄さん羽黒さんチームのカレーを皆さん同時に食べたのです。会場中がし～んと静まりかえってる中、赤城さんだけがガッツリ食べてる音が響いてるのです。赤城さんが食べ終わった？早いのです！まだ食べ始めて時間がそんなにたってないのに！
「次は第六駆逐隊の三人のカレーを、実食！」

私達の番なのです!・やっぱりし～んと静まりかえってるのです。なんかすごいドキドキするのです。響ちゃんと雷ちゃんの二人と手を握ってましたが、ついギュっと力を入れすぎてしまいました。

「大丈夫だよ」

響ちゃんも雷ちゃんも電に笑顔をくれます。赤城さんは相変わらず食べきってしまったのです。そんなにお腹すいてたのです?・

「どちらも甲乙つけがたいカレーだった。それでは審査に入る」

審査員の皆さんが集まって話し合いをしているのです。電はもう目を閉じて祈るしかないのです。

「確か・・・・・った・・・・共には・・・・・・・」

「・・・すね。それなら・・・・・・・ですか」

「でも・・・・・ご飯が・・・・・」

「両方・・・・・・・たでち」

「私は断然・・・カレーだな」

「僕も・・・カレーの方・・・・・・・から」

「私はやはり・・・・カレーですね」

「美味しいかった・・・流石に・・・・・・す」

「勉強になりました、・・・・・・・カレーですね」
「よし、決まりだな！」
「どうやら、審査員達の話し合いも終わり今大会の優勝チームが決まったようです」
「どちらのチームも美味しそうだったからどっちが勝つのか那珂ちゃん分からないよ～」
「私も気になります！それでは皆さん長らくお待たせ致しました。これより審査員長でありカレー大会実行委員長である元帥より、今カレー大会の優勝チーム、すなわち鎮守府お料理Ｎｏ．　１の発表です！」
　お願いします。どうか私達に勝利を！
「まずは、どちらのチームのカレーも非常に美味しかった。どちらかを選ばなければいけない我々の辛さを皆も理解して欲しい。それでは今期カレー大会優勝チームを発表する。優勝は・・・・・・・響・雷・電の第六駆逐隊チームだ」
「「わぁぁぁい！やったぁぁぁぁ！」」
　優勝出来たのです！響ちゃんと雷ちゃんが頑張ってくれたからなのです。電は何もしてない・・・・・・・
「電、どうしたんだい？」
「電は役立たずなのです。スパイスを間違えたり手をケガしたり、今回何もしてないの

です」
「違うよ。電は覚えてるかい?カレー大会に出ることになった日のこと」
「鳳翔さんとまるゆちゃんが暁お姉ちゃんのレシピを持って来てくれた時のこと?」
「そう、その時電は足柄さんに辛いだけがカレーじゃないって言ってたんだよ。その言葉のおかげで暁姉さんのレシピをベースにいろいろアレンジを試せた。多分、レシピそのままでも勝てたと思う。だけどそれじゃ優勝出来ても私達の力じゃないんだ。アレンジを試せたおかげで暁姉さんと私達三人の力を合わせて勝てた。これは第六駆逐隊四人の勝利なんだよ。だから電。役立たずなんて言わないでおくれよ」
「そうよ電!皆で頑張ったから勝てたのよ。最初に皆で勝つって決めてそれで勝ったんだから役立たずなんていないわ」
「響ちゃん雷ちゃん!うぁぁ・・・ひっく・・・ぐすん・・・」
　電はこの鎮守府にこれて良かったのです。涙が止まらないけど、これは嬉しくて出る涙だから良いのです。トラック基地には別の電がいたから解体されるんだと思っていたけど、なるだけ解体しないで建造に制限をして周りの基地に割り振るという元帥の考えのおかげで電は最高の家族に出逢えたのです!早く暁お姉ちゃんにも会いたいのです!

# 蜻蛉切り！

「今度はあきつ丸か」

俺の名前は暁だ。退職届けを出したのに受理されず、有給消化されてる悲しい艦娘だ。また、説得に来たんだろうか？

「実は相談がありまして・・・・・・・」

「・・・・・・相談？」

嘘だろ！三度の飯より闘う事が大好きな生粋のバトルジャンキーのこいつが相談だと！

「実は、次回予定されている大規模作戦に合わせてクーデターを画策している馬鹿共がいるのであります」

あぁ、仕事ね。そう言えばこいつ憲兵隊の隊長だっけ。良かったこいつから恋愛相談なんてされた日には悪夢でうなされそうだ。

「きな臭い話だな。標的は、元帥をはじめとした親艦娘派か・・・・・・それでその情報はどこまで信用出来る？」

「１００％でありますな」

こいつ言い切りやがった。ということは、うわ、ドヤ顔してやがる。
「準備がすでに終わってるからであります」
やっぱり・・・・・・
「その方が効率が良いでありますから」
全く何の為の憲兵なんだろう？
「お前はただ暴れたいだけだろう」
「隊長はよく分かってるでありますな」
嫌だもぅ、闘う舞台を整えたかっただけじゃないか！憲兵隊を私物化しやがった。誰だよこいつを憲兵隊の隊長にしたのは・・・・・・元帥だったな。
「もう隊長じゃないよ。特務隊は解散しただろう？」
「今回の件で復活させたいと隊のメンバー全員から要望がありまして、私が来たのはそれを伝える為です」
「全員からか・・・・・・」
本当にどうしよう・・・・・・全員からとか怖いんだけど！あきつ丸も含めてあいつら頭のネジが外れてるんだよな、まるゆだけだよ癒しは。鳳翔は普段まともなだけに戦闘の時のハジケっぷりが凄いし、球磨は「鮭食べたい」って北海道に行って手配されてた人食い羆を邪魔だって絞め殺してお土産って持ってくるし、雪風は「幸運の女神のキ

スを感じちゃいます」ってギャンブル依存症だし、誰だよこいつら建造したの・・・・・・元帥だったな。吹雪からもう建造しないでくださいって泣いて止められてから建造してないや。大型建造でもないのにあきつ丸とまるゆ建造しちゃって書類が大変なことになったしな。

「隊長、どうしたんです。そんな遠い目をして?」

「いや、いろいろ考えててな。まぁ、元帥はお前とまるゆが護衛について鎮守府は残りの三人がいれば大丈夫だろ」

「それでは隊長は復帰ということで皆には伝えておくであります」

「いつそんな事言ったよ!」

こいつと話してると悩んでるのが馬鹿らしくなるな。

「そう言えば今日はカレー大会でありますな。隊長の優勝予想は誰でありますか?」

「第六の三人だな」

「珍しく身内贔屓な予想ですな」

「俺の持ってるカレーレシピの中で一番のレシピを渡してあるからな」

「おや、今までのカレーは一番じゃなかったのでありますか?」

「その時食いたいカレーを作ってたからな」

「十分美味しいカレーでしたがそれでも一番じゃなかったのでありますか?」

「そうだな、まぁあれはあれでうまいカレーだからな」
　元の世界のバイトしてたカレー屋のトップ５のカレーだから旨いに決まってる。テレビの取材も来てた店だしな。こら、こっち見てやれやれみたいな顔をするな！
「そう言えば吹雪さんから伝言があるのを忘れてました」
「ん、なんだ？」
「大規模作戦前の個人演習大会のエントリーどうしますか」
　個人演習大会か・・・・・・出なくてもいいや。むしろ出たくない。艦種別と無差別があるけど出るとうるさいんだよな。呉の大和と長門や佐世保の武蔵と金剛とかたまにトラックの那珂が・・・・・・那珂は大人しくアイドルすれば良いのに。
「出ない。俺は退職届を出してるんだから参加しなくても良いだろう」
「それであります！何故退職届を出したんです？」
「もう、仕事したくないから」
「・・・・・・しなければ良いであります。もともと人間達の仕事でありますから、隊長は艦娘のことだけやれば良いであります」
「その艦娘の為の仕事だからなぁ」
「もう形は整っているのだから任せれば良いんですよ」
「いいのかなぁ」

「隊長は社畜精神溢れてるでありますな」
　社畜いうな、俺の心に刺さるから。
「ところで、吹雪は知ってるのか？」
「何をでありますか？」
「クーデター」
「知らないですな。大規模作戦総旗艦でありますから余計な心配をかけるのも問題になりそうですし、表は吹雪さん、裏から特務隊でしょう？」
「そうだったな・・・・・・」
　ため息がでる。シンプルに、元に戻れば良いか・・・・・・
「さて、それでは戻るでありますよ。皆に隊長復帰を伝えなきゃならないでありますからな」
「大規模作戦の日程は変わってないな？」
「ええ、変わってないです」
「これを持って行け、お前にやる」
　壁にかけておいた刀を渡す。
「これは？」
「柱島の工廠妖精が遊びに来てな、暇潰しで作った艦娘用の軍刀だ。銘はまだない。陸

軍出身のお前にぴったりだろう？」
「良いでありますな、今までのは深海棲艦を切ると折れてましたから・・・・・・・」
「はぐれで試し切りしたけどきちんと切れたぞ」
　すっぱりいきすぎて焦ったけど・・・・・・
「ありがたく頂きます。銘を決めて貰えませんか？」
　何が良いかなぁ、あきつ丸だからなぁ。
「こんなのはどうだ、『蜻蛉切り』。あきつ丸が死ぬ時はその刀で自刃する、それまではその刀がお前の相棒だ」
「蜻蛉を切る為の刀でありますか、良いでありますな！それまではこの力、守る為に使わせて頂くであります」

# 個人演習大会！

「何故暁さんが参加してないのです！」
「本当だ！何故『魔王』が出ていない？リベンジ出来ないでわないか」
殺気だつ大和型、呉の大和と佐世保の武蔵が吹雪さん詰め寄っている。苦笑いを浮かべるくらいしか出来ることがない長門だ。
「そういきり立つな。暁さんが出ないのは次回の作戦に参加しないからだ」
ほっ！と安心したような安堵の表情を吹雪さんが浮かべている。助け船を出せて良かった。
「参加しないだと！どういうことだ！」
「次回作戦はこの国の総力を上げたもののはずでは？」
うぉっ、標的がこちらに変わってしまった。まぁ、知らない仲ではないしなんとかしてみよう。
「・・・・・・そうか、お前達は駆逐艦一隻いないだけで作戦が失敗すると言いたいんだな。情けない。大和型の名が泣くな」
「なんだと！」

「お前達はわかっていない。暁さんがどれだけ強くても駆逐艦なんだ。戦艦とは艦種も役割も違う。そんな存在の何をこだわっている」
「負けたままではいられないだろう」
「そうです。その駆逐艦に破れた私達はなんなのですか?」
「それはお前達が弱いからだろう!暁さんは言ってたぞ。「大和も武蔵も戦艦の癖に闘い方を知らないんだな」ってな。言ってる意味が分かるか?お前達は闘い方を知らないから負けたんだ。今のようにわめいてるうちは暁さんには絶対に勝てんよ」
　艦種の違いによる闘い方・・・・・・暁さんらしい言い方だったな。闘い方を知らないから負けた・・・・・・まぁ、闘い方を知っていても暁さんに勝つのは相当骨が折れるがな。私が知る限りでは、暁さんに勝った事があるのは吹雪さんくらいのものだろう。それでもようやく戦術的勝利B　判定だったが・・・・・・もちろん私も勝った事がない。砲撃が効かないからって間接技はないと思う。いつも砲撃や魚雷を目眩ましに使い超接近戦をされて負ける。私も学んで近づくパターンをしらみつぶしに消して行くのだがな、気づくと負けてしまう。
「それに次回の作戦の総旗艦は吹雪さんだ。暁さんにも勝利したことがあるこの人がいて失敗すると思っているのか?」
　あっ!あぁ、失言だ。くっ、元帥を笑う事が出来ん。二人の雰囲気が・・・・・・あ

れ？
「『魔王』に勝っただと・・・・・・」
「さすが『鬼嫁』と言うべきなのでしょうか」
い、いかん！大和が、大規模作戦前に使い物にならなくなってしまう。
「『鬼嫁』ですか・・・・・・」
「・・・ひっ！」
「吹雪さん何か漏れてる！いい笑顔なのにどす黒い何かが漏れてるぞ！」
「暁さんを気にするくらい元気が有り余ってる大和さんには私と個人演習をしましょうか？」
そう言うと大和の腕を掴み引き摺りながら行ってしまった。
「長門よ。元帥旗下の艦娘は皆化け物ばかりなのか？」
「そんなことはないぞ。一部の艦娘だけだ」
「一部だけでも異常だろう、なんださっきのは、駆逐艦が大和型戦艦をただ力だけで引き摺って行ったぞ！」
「吹雪さんは、暁さんに砲雷撃のやり方を教えたいわば暁さんの先生だからな」
「大和は、生きて帰ってこれるのか？」
「吹雪さんとタイマンは、限界突破するかトラウマ抱えるかだけど、大和なんだから大丈

夫だろう!」
「答えになってないぞ」
「うちの駆逐艦が超えられたんだ、大和が超えられないなら戦艦の肩身が狭くなるだけだ」
「・・・・・・長門は倒したのか?」
「な、何を言ってるんだ武蔵?私は戦ってないぞ」
「どういうことだ?」
「あの人とタイマンしたら轟沈してしまうじゃないか!」
　私が知る限り、元大本営から移動した艦娘達はトラウマ持ちだ・・・・・・・
「おい!さっきまでと言っていることが違うぞ」
「気にするな、大和なら大丈夫だろう。何せ暁さんと闘いに来たんだから・・・・・・・吹雪さんに勝てなきゃ暁さんに勝つなんて出来る分けないだろう」
「それはそうなんだが、元帥旗下で無差別に出るのは誰なんだ?」
「不知火だ・・・・・・・」
「は?吹雪じゃないのか」
「不知火は暁さんの弟子だぞ。簡単に勝てると思うなよ」

こんにちは！暁だ。一応転生者でもある。今俺は夕張に渡した設計図を元にカスタムされたコンテナのテストを兼ねて来た北海道からの帰りだ。
「という事が個人演習大会前にあったクマ」
「それで大和はちゃんと呉に帰れたのか？」
「２日ほど入渠してから帰ったクマ」
「２日って轟沈レベルじゃねぇか！」
いくら禁句を言ったからってやり過ぎだろ、戦艦が轟沈クラスのダメージってことは魚雷を何発当てたんだ？
「大和が抵抗も出来ずに踊らされてるのを見て周りはドン引きだったクマ」
そりゃそうだ、ただの駆逐艦がこの国の名を冠する戦艦を一方的に殺ったら引くだろう。
「ただ次の総旗艦が吹雪さんと知ったから皆言うことを聞くと話てたクマ」
何それ？ただの恐怖政治じゃないの？
「それで球磨は何しにこんなところに来たんだ？」
「哨戒任務という名の鮭漁クマ！」
そう言えばこういう奴だったな。
「隊長こそこんなところで何してるクマ？」

「今住んでる所に妖精さんが燻製用の小屋を作ってくれたから鮭を獲りに来た帰りだ」
「球磨も食べたいクマ!」
　ダメって言ってもついて来るだろうな。
「しょうがないな、ただ時間がかかるから次の作戦の時に持って行くよ」
　これで回避出来たな。出来れば隠れ家はあまり知られたくない。
「やったクマ!ところでそのおっきい艤装は何クマ?」
「これか?夕張と妖精さんがアニメに出てきた武装を形にしたもんだ」
　俺しか装備出来ないけどな。試作の時に吹雪は重さで沈んでいったし、艦これってこういうことも出来るんだな。俺は吹雪ほど砲雷撃が上手くないから物量に頼る事にしたいという要望に夕張達がネタ装備で答えてくれた。この世界のアニメシリーズ、『カンタム』に出てくる装備を形にしたものだ。花の名前がついた人形のロボットに最大火力をというコンセプトで作られた補助ユニットを模倣したその名も『ヤタガラス』戦艦の砲撃能力と雷巡の雷撃能力、駆逐艦の速度を越える能力を兼ね備えた補助ユニットだ。
「夕張が妖精さん達とこそこそやってたのはそれだったクマか」
　・・・・・・うん、確実にバレてるな。まぁ、資材は俺の手持ちから出してるから良いか。

「そうだ球磨、これを鳳翔に渡してくれ」
「何クマ？」
「マグロだ」
　俺は魚雷発射管からマグロを取り出して渡す。ここに来る途中で大量に氷を買って中に突っ込んである。管制システム関係は帰ってから作る事になってるから即席のクーラーボックスだ。
「すごいところから出てきた」
　語尾を忘れるほど、驚くことか？
「頼んだぞ」

「元帥大変です」
「どうした？」
「大洗漁港に新種の深海棲艦が出たそうです」
「何！被害は？」
「ありません」
「はぁ？」

「それが・・・・・・人語を解し、大量の氷を購入して艤装にいれていたとの事です」
「何それ？」
「私もよく分かりません」
「大事な作戦前だ、哨戒を増やして情報を集めてくれ」
「分かりました」

# クマ！クマ！クマ！

その子は捨て子だった。

赤ん坊の時に孤児院の裏口に捨てられていた。見つけたのは院長で、すぐに保護し警察に届けた。赤ん坊の所持品は毛布と通帳と印鑑。すぐに親を警察は特定したが、すでに亡くなっており身寄りも見つからなかった為そのまま孤児院に引き取られた。しかし、出生届等の法的手続きが何もされていなかった為、名前をつけるところからがスタートだった。

赤ん坊の名前は『暁（あかつき）』。院長が赤ん坊を見つけた時間帯の名だった。院長は赤ん坊にどんな暗闇の絶望にも耐え希望の夜明けを手にする事が出来る強い人間に育って欲しいと想いをこめ名付けた。

「なぁ、今の話って本当に暁さんの話なのか？」

「プロローグークマ。暁さんの産まれの秘密だクマ」

「いや、姉ちゃん絶対おかしいから！艦娘なんだから赤ん坊の話なんてあるわけないだろう！」

「改二はキャプテンキソーって秘かにみんなから言われてる割りに木曾はロマンがない

クマね～」
「ちょっ!ちょっとそれ具体的に誰が言ってるか詳しく!」
　よう!球磨型五番艦木曾だ。『おっぱいのついたイケメン』は暁さんに言われた事があるけど『キャプテンキソー』はなんか嫌だな、中二病っぽい。今、球磨姉ちゃんに連れられて任務中だ。他にも別の場所で待機しているメンバーがいるらしいがそもそも何の任務なのかも分からない。時間になったら教えると球磨姉ちゃんに言われて、待っている間に現在家出中の暁さんの事を聞いてみたんだが・・・・・・
「そもそも木曾が聞いて来たのに全否定は酷いクマ」
「でも今の話は作り話だろう?」
「それは誰にも分からないクマ、産まれた時から艦だった頃の記憶を持つ艦娘の私達には特にね。木曾だって分かるだろう?」
　語尾がない・・・・・・真面目な姉ちゃんモードか、本当にあるのか?
「艦の記憶は乗組員の記憶でもあるか・・・・・・」
「暁さんから聞いた今の話の『暁』は壮絶な人生を送っていたクマ」
「でもそれっておかしくないか?」
「何がクマ?」
「そんな記憶があるなら他の艦娘の『暁』だって影響があるはずだろう」

「まぁ、暁さんが趣味で書いてた自伝のライトノベルだから他の『暁』は関係ないクマ」
「結局作り話かよ！」
「静かにするクマ、全く木曾は困った妹クマ」
　やれやれと姉ちゃんがかぶりをふると特徴的なアホ毛が馬鹿にするようにゆらゆら揺れる。それを見て少しいらっとするが我慢する。
「それで後どれくらいしたら始まるんだ？何の任務かも聞いてないから分からないんだけど」
「鳳翔から連絡が来るまで待つクマ。これは特務隊全員参加の任務だから連絡が来たら話すクマ」
「特務隊の任務って！何でそんな！多摩姉ちゃんじゃダメだったのか？」
　話でしか聞いた事はないが特殊任務部隊。略して特務隊。元帥が唯一建造した六隻の艦娘からなる自由裁量件を許された者達。過去の大規模作戦で劣勢だった大本営の艦隊を横目に鬼や姫といった深海棲艦達を屠り、シーレーンの確保を盤石にした艦娘達。その全てが二つ名を持ち日本の艦娘の頂点とも言える存在。その任務達成率は１００％。普段はそれぞれが個人で自由に動いているのに全員参加の任務という事はこの国の危機と言う事。
「ん、多摩なら鳳翔の護衛についてるクマ」

「っ!北上姉ちゃんと大井姉ちゃんは・・・・・・って大規模作戦に行ってたか」
「落ち着くクマ。球磨は木曾ならこなせると信じて連れて来てるクマ。これは球磨型としての試験も兼ねてるクマ。この任務をこなせない様なら木曾は他の基地に移動になるクマ」
「なっ!」
　さりげなく左遷が宣告されたぞ。
「まっ、そうなることはないクマ。今のお前なら簡単なお仕事クマ」
「姉ちゃん・・・・・・」
　良かった。本当に左遷になるかと思った。グッと親指を立てて良い笑顔だ。でもなんだろうこの胸騒ぎは・・・・・・・
「何せこれから始まるのはこの国の未来を決める闘いクマ!」
「何その無理ゲー!」
　思わず叫んだ俺は悪くないはず!
　ゼーハーやってると耳に付けた無線から声が聞こえてきた。
「球磨さん聞こえますか?」
「鳳翔、聞こえるクマ」
「そちらに多分本体と思われる十二隻と司令官用の船が向かっています」

「了解クマ、相手は例の奴クマ？」
「えぇ、雪風さんの方は暁さんがフォローしてますからそちらはお願いしますね！」
「なんとかするクマ」
「姉ちゃん、結局相手はなんなんだ？」
「・・・・・・艦娘クマ」
　少し怒りを滲ませた表情の姉ちゃんに驚くが今なんと言った？
「洗脳処置をされた艦娘が今回の相手クマ。大規模作戦に合わせ大本営に対しクーデターを起こすバカ共がいるクマ」
「戦力の薄くなった所への強襲って事か？」
「さらに隊長が愛想を尽かして行方不明の情報も漏れてたクマ」
「そいつらにとっては最高の機会だな」
「まぁ、漏らしたのは憲兵隊の『剣鬼』クマ」
「はぁ？」
『剣鬼』ってあきつ丸さんか・・・・・・特務隊のメンバーじゃないか、何でそんな事を？
「クーデターの情報はもともと掴んでたクマ。だから一網打尽にする機会にする為にわざと流したクマ」

そう言う事か・・・・・・誘い込んで一気に殲滅、さすが特務隊のメンバーだ。
「あいつはただ自分が暴れる舞台を作りたかっただけクマ。あと、特務隊を復活させる口実作りクマ。特務隊は基本的に隊長が責任を取ってくれるクマ、今の『剣鬼』の立場でやると面倒くさいからクマ」
うん、理由が最低だった。暁さんは仕事したくないから家出したのに仕事を増やすなんて鬼畜だな。というか特務隊って姉ちゃんも含めてキャラ濃いな。もしかしてそれが嫌になって特務隊を解散したんじゃ・・・・・・
「何か失礼なこと考えてないクマ?」
・・・・・・読まれてる。さすが姉ちゃん、そこに憧れもしびれもしないけど。
「まぁ、なんと言うか暁さんは凄いな」
「そりゃそうクマ。球磨達の隊長なんて暁さんか吹雪さん位しか務まらないクマ」
吹雪さんも大丈夫なのね。まぁ、あの人なら可能か・・・・・・
「来たみたいクマ。相手はなるべく無力化して保護するクマ、球磨は司令官を抑えるから木曾は艦娘を頼むクマ!」
「んおぉォイイイッッ!十二隻も相手しろって言うのかよ!」
「当たり前クマ、言っただろう木曾の試験も兼ねてるって!さっさと行くクマ!」
「分かったよ。あいつらに本当の戦闘ってヤツを教えてやる!」